

し獨軍砲の射程外に居りながら、却て獨軍を其砲の射程内なる遠距離に保持する如き對勢を採つた、故に此時期には一萬八千米突以内に接近したことは一回もなく、從て獨軍は英軍が其射程内に入つたか否かを檢する爲め、又其れすらも彈藥節約の爲め極めて緩徐なる射撃を試みたに過ぎない。

故にヒツベル隊では照準點として煙突又は檣の上端を撰んだが、此の如き遠距離ではビィテイ隊に於ても射撃の効果が不良であつた、されど其齊射は甚だ集彈的に行はれたが、其射撃指揮は決して巧妙とは申されない、是れ展望不良の結果であらうと言ふ。

其れは兎に角として、英軍の齊射彈はデルフリンゲルの前後

遠近不同の點に集彈落着したが、二乃至三發の主砲彈が此時期に命中したのは確實である。

全速力で北上中のビィテイ隊は須臾にして濛氣と砲煙及煤煙との裡に遂にヒツベル隊の視界外に逸したので、フォン・シエーアは午後五時二十一分巡洋戦艦は追躡せよとの信號を掲げたが、劣速の爲め追及し得なかつたので、代りて英の第五戦艦戦隊を目標としたが、之れも距離が遠きに過ぎ、何等記述すべき格別の事がなかつた、と述べて居る。

フォン・シエーアは斯くして獨軍の砲火が漸次減下せんとするを見るや、英軍が避退に成功せんことを恐れ、同五時二十四分全軍總追撃増速を命じた。

午後五時三十五分ビィテイ中將はジエリコー隊(主隊)の方位を北十六度西と推定したので、快速を利用して針路を北々東より漸次北東に變じ、尙獨艦隊と一萬二千八百一米突の距離を保ち、居つた、獨軍も亦前進せる第二偵察戦隊の一艦が英の第三巡洋艦戦隊(フード少將指揮)と衝突せし旨の報告に基き、英軍の運動に準じて漸々東方に變針した、ヒツベル隊の旗艦リュツツオウは此状況をシエリアに報告せんとしたが、無線電信機が敵彈の爲めに破壊されて果し得なかつたと云ふて居る。

之より先き英軍は夕陽を背にして居たので、其艦影が鮮明なる不利はあつたが、ヒツベル隊もシエリア隊の先頭も高度低き太陽に面して居つた爲め、彈着の観測困難で一時射撃を中止し

た、而してシエリアはヒツベル隊及主隊の先頭隊も東方に變針し、始むるを認め、之は前に與へた總追撃命令に遵據したのであるが、當時シエリア隊は梯陣列を以て北西に航進して居つたが、午後五時四十八分嚮導隊に續航せよの信號を掲げ縦陣列となし、次で一時十五哩に減速せしめた、之は英の輕快部隊がヒツベル隊を襲撃せんとしたが、之を反撃することが不可能(太陽に面して居た爲め観測困難)であつた爲め、齋動を以て南西方に避退したので、全隊の集來を可能ならしむる爲めであつた。

午後六時前獨第二偵察戦隊は英の輕巡洋艦戦隊及エジンコート(第一戦艦戦隊の四番艦)以下數隻の戦艦を發見したが、水面上の濛氣の爲め英の全兵力を確認することが不可能であつた

が、同六時二分にシエーアは輕巡洋艦ウキスバーデンは、英の大艦數隻（英公報によれば第三巡洋艦戰隊らしく、フオン・ハーゼに）より砲撃を受け進退の自由を失つたと云ふ報告を受けた。

ウイスバーデンの附近に居た第十二半驅逐隊及第九驅逐隊は形勢の危急なるを認めためたので、前方に突進したが、北西に航進中の戦艦多數第三巡洋艦戰隊ならんより成る英の戦列から砲撃せられ、六千米突まで接近し雷撃を加へたが効果は不明であつた。

之より先きシエーアは此の如く先頭部隊が英軍の前衛部隊と衝突したので、追撃を何時まで繼續すべきやの問題を解決すべき必要に迫られた。シエーアに従へば既に敵に遭遇せる以上

は出動前に豫定した如く、スカゲラック方面の伴動は問題ではない。英軍主隊即ち大艦隊が出動中なるは疑なき事實だから、翌即六月一日には彼我主隊の大海戦が演ぜらるゝであらう。故に英軍水雷戦隊の夜襲による獨主隊の損害を避くる爲め夜暗前に英の輕快部隊を掃蕩する必要があると斷定した。

此に於て疑を生ずるは初め獨軍は其全力を以て英軍の分力を撃たんとの考慮から、總ての作戰計畫を立案して出動したのであることは前述の如くである。然るに今英軍の前衛に遭遇し其主力の出動を知らながら依然として猛進したるは、是れ攻撃精神の旺盛なる結果として賞揚するは蓋し當を得たるものではない。司令長官新任早々の海戦に於て英軍の巡洋戦艦二隻を

撃沈し得、意外の成功を贏ち得たるを以て其成功は過度にフォ
ン・シエリアを誘惑したるものならん。

時に大艦隊の總旗艦アイヨン・デュークの推測に依るピロテ
イの旗艦ライオンの位置は北緯五十六度四十二分東徑五度四
十四分で北々西に向ひ二十五哩の速力で北上中であると推測
して居たが、ライオンの推測位置はアイヨン・デュークの推測位
置の東約十二哩であつたことが後に明瞭となり、且此の如く推
測位置の相異の爲め敵はジエリコー隊の前方に現はれないで
右斜前に現はれ豫期よりも二十分早かつた。

此時に至るまでジエリコーは何故にピロテイに與へたる命
令通り第三巡洋艦戦隊及カンターベリ、チエスタの二輕

巡洋艦をピロテイの麾下に歸還せしめざりしか頗る怪訝に堪
へざるなり。

曩にも述べた如く、分れて進む各隊は常に連絡を維持する必
要があるにも拘らず、當時敵前であつたから無線電信の使用を
差し控へて居たとは云へ、ジエリコー隊もピロテイ隊も多數の
巡洋艦を有して居たのであるから、此等を使用して兩者の連繫
に任ずべきであつたが、午後二時に至るまで此處置に出でざり
しのみならず、出港前にピロテイに與へた命令に在る通り第三
巡洋艦戦隊及カンターベリ、チエスタの二輕巡洋艦をピ
ロテイ隊に歸還せしめざりしは如何なる理由に據るか、此の如
く巡洋艦の使用が適當でなかつたことはやがて兩隊位置不明

の因となり、互に位置推測の錯誤を來し、從て合同に際し大混亂を招くに至つた。

第十二章 英軍主隊合同後の戦況

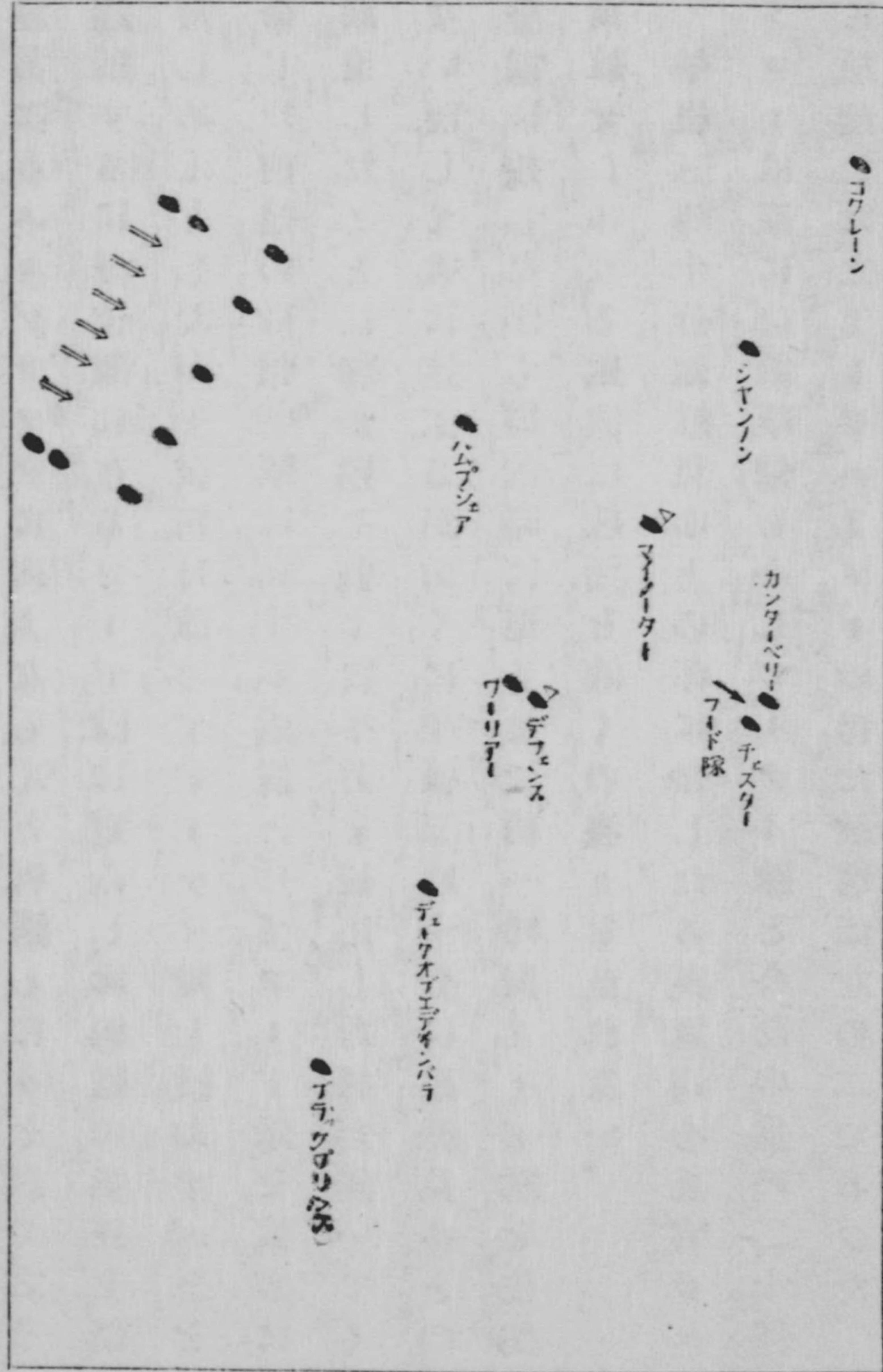
之より先き英軍主隊(ジェリコー隊)は第九章に述べた如く、五月三十一日午後二時には北緯五十七度五十七分東經三度四十五分(豫定のA地點の北々西約二十哩)に達し、編制第五即ち第一戦艦戦隊を右翼列とし、第四戦艦戦隊を中央に、第二戦艦戦隊を左翼列とし、各隊小隊縦陣なるが故に全隊としては六列の並縦陣列(列の間隔十一哩)を制り、第四輕巡洋艦戦隊及第十一、第十二水雷戦隊を伴ひ、第一、第二巡洋艦戦隊を主隊の前方十六哩に、北四十度東南四十度西の方位線上に於て各艦八哩の間隔を以て左より右にコクレン、シヤンノン、マイノーター、デフュンス及ワ

トリョリアの二隻デユーク・オブ・エデンバラ、ブラック・プリンスの順序を以て搜索列を張り、

註 ハムプシエアはマイノーターの後方六湮に在りて連絡に任ず。

第三巡洋艦戦艦戦隊(司令官フード少將)を同じく主隊の前方二十湮に出し、全隊十八湮半の速力にて南五十度東に定針し、Z形運動を行ひつゝあつた、故に主隊は十四湮の前進速力を有して居つた譯である。

午後二時十八分ガラチアよりビィテイに宛てたる敵らしき輕巡洋艦二隻を東南東に認むとの警電を傍受せるジェリコは、此等の獨艦は英艦隊を視認せば、必ずや當時の對勢上逃走に



容易なるスカゲラックに向ふならんと判断したるを以て、之を遮断するに好位置に在るフード隊に電命し、此獨艦の退路を断たしめんとしたが、午後四時改めてピロテイ隊を援助すべきを命じた、前述の敵情判断に對する處置としてフード隊を東方に派遣したことは聊か鶏を割くに牛刀を使用した嫌が無いでもない、而して次に述ぶるが如くに午後三時十分に敵艦見ゆとの警電に接しながら、同四時に至るまで約一時間フード隊を依然東航せしめたる處置は敏活を缺くの嗟りを免れない。

午後三時十分敵艦見ゆとの報に接したる英軍司令長官ジェリコは直に合戦準備を令しピロテイ隊と合同の爲め二十哩に増速した、之よりジェリコの得た敵情は左の二であつた。

一、午後三時四十五分ピロテイより

我位置北緯五十六度五十三分、東徑五度三十三分、敵の針路南五十五度東

二、午後三時五十五分ピロテイより

我位置北緯五十六度五十三分、東徑五度三十一分、交戦中

右の如くジェリコの直接接受したるは二項に過ぎぬが其外此前後に於てピロテイ麾下の諸隊間の通信を傍受したるものもあらんと信ずるが、其れは第一一六頁及び第一一七頁に記したるものと外は不明である。

之より先き主隊の前方二十哩に占位せる第三巡洋艦戦隊(フード隊)は輕巡洋艦チェスターをしてフード隊に續航せる巡

洋艦戦隊との連絡に任じ、同カンターベリーを正横に配し南下中なりしが、同隊は午後二時四十五分第一軽巡洋艦戦隊(ビィテイ隊附属)より北緯五十六度五十二分東経五度三十五分の地點に於て、北上中なる敵艦見ゆとの報に接したるを以て之を遮断する爲め轉向し、ジエリコー隊の針路より東方に逸脱し在りしが、午後四時五分南方約六十哩、北緯五十六度五十三分東経五度三十三分の地點に於て、交戦中なるビィテイ隊に赴援すべしとの命を受け、且つ敵の針路は午後三時五十分には南五十五度東なりとの通報ありしかば、同隊は南微東に變針し全速急航した。

午後四時十五分フッド隊より、我位置は北緯五十七度三十九分東経五度三十五分、針路南々東速力二十五哩にて急航中との

報があつた。

而して午後五時三十分に至りフッド隊に續航せる輕巡洋艦チエスタより(當時同艦はフッド隊の北七十度西五哩に占位せり)探照燈信號にて同艦は南西に砲聲を聞き且發砲の閃光を認めたるを以て之を偵察する爲め南西の方向に變針したとフッドに報じ來た、而して同艦(輕巡洋艦チエスタ)は午後五時三十六分數隻の驅逐艦を伴へる一隻の獨輕巡洋艦二橋三煙突を認めたので、約五千四百八十六米突の距離で交戦したが、間もなく獨艦には二三隻の輕巡洋艦の増援を見たので北東方に變針したが、獨戦隊之を追撃し來つたので尠からず損傷を受けた。

午後五時四十分まで南々東に進航中なりしフッド隊は、西方

に獨巡洋艦數隻を認めたるを以て西北西に變針した。

司令官フールドは主隊と巡洋艦戦隊との關係位置推算上の差異に因り、指導を誤り、遠く東方に進み過ぎ、事實上交戦中なるビロイ隊の前方を横過し、後遂に獨軍の前進巡洋艦數隻に出會するに至つたのだと云ふ。

午後五時五十二分フールド隊及輕巡洋艦カンターベリーは獨の輕巡洋艦三隻(獨の第二偵察戦隊ならん)がチエスタ及英驅逐艦アカスタ、シャーク、オフエリア、クリストフ、アー等を砲撃しつゝあるに出會し、該獨艦等と交戦し午後六時其一艦を撃沈した、此時英軍に在りてはシャークを失ひアカスタは大損害を受けた。

北西方に航進中のフールド隊は午後六時十分に至りビロイ隊を發見し、同六時二十一分ビロイの命に依り其旗艦ライオンの先頭に占位した、而してチエスタは當時より第二巡洋艦戦隊の後尾に占位し終夜同隊に隨伴した。

此の如くしてフールド隊はビロイの麾下に復歸し旗艦ライオンの前方に占位し、ヒツベル隊の嚮導艦デルフリングと九千乃至七千三百米突に接近し交戦しつゝあつたが、午後六時三十分其旗艦インサキンシブルは轟沈せられたので、ビロイは旗艦ライオンをして嚮導せしめ、フールド隊をビロイ隊の後尾に就かしめた。

之より先き又主隊の前方十六浬に搜索列(列)の中心はジエリ

コーの旗艦アイヨン・デュークより南東微南の方位に在つたを張りて南下中の第一第二巡洋艦戦隊は午後五時四分接近占位せよとの命を受けたが、午後五時四十分マイノーターは其前方に於ての重砲砲聲を聞き直に南方に砲聲を聞く旨ジェリコーに報告した間もなく濛氣の中に其艦影を認めたので之に挑戦した。

僚艦コクレトン及シャンノンの二艦を召集し、戦闘旗を掲げ戦列を形成したが、當時如何に濛氣深かりしとはいへ、マイノーターが挑戦せし艦は僚隊たるフード隊であつたとは、英軍に識別信號の不充分であつたことが證明せられる、而して第二巡洋艦戦隊は東方に向ひ獨敷設艦の警戒に任じた。

又第一巡洋艦戦隊のブラックプリンスは午後五時四十二分次の如き報告を致した。

我位置北緯五十六度五十九分東徑五度四十二分、獨巡洋艦戦隊を南方五哩に認むと。

次で五時四十六分には第一巡洋艦戦隊より次の如き報告があつた。

我今北緯五十七度七分東徑五度三十八分に在り南々西の方向で交戦中の敵艦は北東に向ひつゝありと。

第一第二巡洋艦戦隊の數艦は午後五時五十五分頃獨輕巡洋艦ウイスバーデンと衝突したので之と砲戦中、濛氣の中より忽然獨ヒツベル隊を近距離に發見したが、當時右翼に在つた第一

巡洋艦戦隊は退却の遑なく其猛火に浴し、同六時十六分デフェンス、ブラックプリンス相續で撃沈せられ、ウォーリアーは大損害を蒙り、運轉不能となり後遂に沈没した。

之れより先英軍主隊(ジェリコー隊)は南下中午後五時北緯五十七度二十四分東徑五度十二分の地點に達し南東微南に變針した、午後五時四十五分砲聲を聞き、同五十五分艦首より右舷正横の間に於て發砲の閃光を認め、次で第一第二巡洋艦戦隊が敵と戦ふを見、次で信號で其の敵として居るのは輕巡洋艦だと云ふことが分つたが、濛氣深く其艦影を見ることが不可能で、從て獨主隊の所在を確認するに由なかつた。

此の如くして英主隊は午後六時には北緯五十七度十一分東

徑五度三十九分に達した。

之より先き午後五時ジェリコーは同時刻に於けるビロタイ隊の旗艦ライオンの位置は北緯五十六度四十二分東徑五度四十四分に在りて、北々西に向ひ二十五哩の速力で北上中だと推測して居つたが、實際はジェリコーの推測したものよりも東方約十二哩に偏して居つたことが後に明瞭となつたが其原因を公表して居らぬ。

此の如く推測位置に誤差があつた爲め、ビロタイ隊も其の觸接して居た獨主隊の位置も共に不明で、ジェリコーは獨主隊は英主隊の前方に出現するものと豫期して居たが、實際は豫期に反して右斜前に現はれ而かも時間の上では豫期よりも二十分

も早かつた、其時の状況を次に詳述しよう、午後五時四十五分戦艦マルボロ(右翼列の嚮導艦)は南々西に方りビロタイ隊が猛烈なる砲火を交換しつゝ東航し居るを見、又第五戦艦戦隊を南西方に発見したが、此報告は午後五時五十五分にジェリコに達した、此時マルボロの位置は北緯五十七度四分東徑五度二十九分であつて、ビロタイ隊は南々西三四哩の距離に在つた。之と同時にビロタイより敵情に關する報告が在つた、曰く。獨ヒツベル隊は我が南方に在り

と、次で午後六時十四分に

我(ビロタイ隊)は獨主隊の南々西に在り

との報告があつたが、此時の状況を英公報には次の如く簡單

に述べて居る、曰く

當時ジェリコ隊の旗艦アイヨンデユルクとビロタイ隊の旗艦ライオンとの推測位置に相違ありし爲め、彼我の位置に關する疑惑は一層深さを加へた、尙合同に際しては、彼我の誤認を避くる爲め、尠からず苦心を要したと。

當時英軍に在りては艦位を確定してより、少くも十八時間漫漫たる北海の洋心に馳驅して居たから、主隊もビロタイ隊も其位置が正確なりとは言ひ難い、此の如く艦位の正否が嗣後の作戦に齟齬を來すものであり、殊に濛氣が深く、展望不良の時は一層甚しいから、艦長たるものは羅針儀の修整は勿論、機關の回轉數と實際速力の關係等に就て、不斷の研究を積み、萬一の際遺憾

なきを期して居らねばならぬ。

午後六時戦場に到着せるジェリコーが直に解決を要すべき當面の問題は艦隊の戦闘展開を艦隊の右翼に爲すべきか、又は左翼に爲すべきかに在つた、而して戦勢は一刻も速に主隊の参戦を要して居つた。

然れども如何せん、展望不良であり且友軍の情況も亦敵情も共に不明で稍々正確なる報告を得たのは前述の如く午後六時十四分であつたので、ジェリコーは戦闘展開を令するに不利であつた、而して彼我主隊が殆ど相接觸するに至るまでは、正確に展開方位を決することは眞に困難であつた。

之より先きジェリコーは獨主隊は英主隊の前方に在るもの

と思ふて居たが、前進せる巡洋艦の戦隊は前方より右舷正横に互り激戦中なのを見て、或は獨主隊は自隊の右舷正横に在るとも考へた。

左れば午後六時二分南に變向し、十八哩に減速し、各艦を接近せしめ獨軍の針路は略ビィテイ隊と同一なるべき判断の下に一旦右翼展開の信號を掲げ既に運動中で在つたにも拘らず之を中止し、午後六時十六分均一の速力を以て左翼列を先頭とする戦闘展開の信號を掲げ、右舷正横に在りしビィテイ隊の先頭占位を容易ならしむる爲め十四哩に減速した。

然るに當時展望不良であつた爲め、其信號容易に全軍に到達しなかつたので、一時隊列の混亂を誘起するに至つた。

此展開運動中戦闘序列の西端(右翼列)に占位せる第一戦艦戦隊の旗艦マルボロは、獨第三戦艦戦隊の一艦カイゼル型に向ひ一萬六十米突の距離にて發砲を開始し、各艦之に倣ひ距離次第に減じて八千二百三十米突に及び、午後六時十五分獨軍の齊射弾は同戦艦の三番艦ハッキュールスの前艦橋附近に落着した。

時に獨軍に在つては、巡洋戦艦は、四隻のケーニヒ級戦艦(第三戦艦第五小队)、四五隻のカイゼル級戦艦(第三戦隊第六小队)及四隻のヘルゴランド級戦艦(第一戦隊第一小队)の先頭に立ち東航しつゝあつた、爾餘の諸艦は彼我諸艦と相重疊して英軍よりは之を視認することが不可能であつた。

ピータイ隊は主隊の參戰を速かならしむる爲の全速力にて東航中にフード少將の率ゆる第三巡洋戦艦戦隊が來援したので、午後六時二十一分之に先頭占位を命じた、フード少將は巧に其運動を了し、邁進七千三百十五米突に接近し、先頭を壓迫し西方に回頭するの止むを得ざるに至らしめたが、午後六時三十分砲戦未だ數分ならぬ内に、其旗艦インヴェンシブルは獨軍の集中砲火を蒙りて爆破顛覆した、此に於てピータイはフード隊に後尾に占位を命じた、而して又ピータイ隊は此時主隊の先頭に占位するを得速力を十八浬に減じた。

之より先きピータイ隊の戦闘側先頭に占位しありたる第三輕巡洋艦戦隊は午後六時二十五分獨軍の前方より雷撃を決行

し、フアルマス及ヤーマスの二隻はリュッツォウを雷撃し、次で其大艦と戦ひしも、少しも損傷を受けなかつた、當時獨ヒツベル隊に在りては旗艦リュッツォウは巨砲弾十五發を受け、甚しき損傷を蒙りて落伍し、火災を起し全艦煙に包まれ、艦は一方に傾き又其艦首は深く沈下し、司令長官ヒツベルは驅逐艦に依りてモルトケに移乗した、故に午後九時頃まで暫くの間同隊はデルフリンゲル艦長に依りて指揮された。

之れより先き、ヒツベル隊はビータイ隊の東南東に於て漸次南方に回頭し、續いて六時三十五分に西方に變向した、此頃獨軍の嚮導艦リュッツォウも三發の巨砲弾を受け可なりの損害を蒙つて居つた、フォン・ハーゼに従へば、デルフリンゲルでは總て

の索具及空中線は切斷せられ、無線電信機は辛うじて僅に受信用に便するのみで、主砲弾一發は艦首なる二枚の水線甲帯を劈き恰も水線に於て、六×五米突大の裂口を穿ちしかば、艦の縦動する毎に海水は絶えず浸入した。

午後六時過濛氣の裡に漸く合同を遂げたる英大艦隊は同六時三十分にて於て展開を終り十七節に増速し、大體に於て、ビータイ隊、フールド隊、ジェリコー隊、第五戰艦戰隊の順序に北東より南西に向ひて半月形に配列し、獨軍を掩撃せんとした。

時に濛氣濃密を加へ、煤煙四方に襲きて展望頗る不良なり、英軍の報告に據れば、先頭隊の同時に視得たる敵艦は僅に四五隻

に過ぎず、殿隊は稍々多数なりしも尙八隻乃至十二隻を出でなかつた。

シエーアに従へば、午後六時過ぎには英軍は濛氣及煤煙に蔽はれ、西方より之を通視するに至難であつたが、西方水平線に對する展望良好であつたので、彼我砲火の効力に關しては、英軍は天象上有利なる對勢にあつた。

故に彼は南方の針路で並航戦を持續せば大に不利であると考へた、而してシエーアは前方に在つた友軍の巡洋艦を視認することが不可能であつたので、若しシエーア隊が正面變換を行はば益々該巡洋艦と英軍との距離を短縮し、且之を彼我主隊の中間に占位せしむる如き對勢になる惧があるから、午後六時三

十五分折柄獨軍は曲列なりしにも拘らず、齊動を以て西方に變針した。

此運動中第三驅逐隊の二隻(G八八號V、七三號)及第一驅逐隊嚮導艦S三二號は英軍を襲撃した、シエーアは英軍が獨軍の運動に即應して西轉し其先頭を壓したならば確實に包圍攻撃を繼續することを得たるならんに、其舉に出でなかつたのは、ジエリコーが戦勢を洞察する明がなかつたのか、或は雷撃を恐れて距離の短縮を圖らなかつたのであらうと言ふて居る、吾人は思ふに恐らく後者ならん乎、

註 獨軍は同じ様な運動を前後二回も行つた、其第二回は午後七時十七分頃で逆轉毎に獨軍は魚雷攻撃を行つたが、第一回は午後六時三十五

分頃第三驅逐隊が英軍に對して發射せる魚雷は僅に六發で驅逐隊第四八號は英の重砲彈で撃沈せられ第二回は前述の如く午後七時十七分
 で此時は猛烈な襲撃を行ひ第十七及第十一驅逐隊の各半隊で合計二十
 十二發の魚雷を發射したが孰れも命中はなかつた。

獨軍は偵察巡洋艦の報告に依り英軍主力の接近を豫期したるものゝ如く、漸次南方に變針し、同心圏の内圏に據りて對勢の優位を維持せんと努力したるものゝ如く、又之と同時に煙霧に乗じて連續數回に互り水雷戦隊の強襲を行ひ、此時獨軍は驅逐艦をして特に噴出せしめたる濃厚なる煤煙を利用して其踪跡を晦し、英軍と離隔せんと試みた如くであつた。

此海戦後ジェリコーは非難の焦點となつた、ジェリコーは終にグラランド・フリートと命名せる一書を著述し、彼自身の辯護に

力めた、而して其非難は此海戦に於ける指揮統帥の拙劣なりし點より牽ては往時軍政の局に當り居りし時代施設宜しきを得ざりし點にまで及んで居る、然れども要するに此海戦に於て英軍は大勝を博すべしと信ぜし英國國民の期待に副ざりし一點に出發して居る、其内具體的のものとしては三十一日の午後六時戰場に到達せし英軍が日没に迫り一刻も速に參戦すべかりしに、彼は左翼に戦闘展開を爲したる爲め敵に遠ざかり、參戦の時間が少くも三十分遅延し、從て日中に決勝的の大打撃を與へ得ざりし點に在る、之に對しては彼は、成るべく速に發砲を開始し得る様右翼に展開する方が宜しいのは明白であるが、獨軍は必ず水雷戦隊を其先頭に集中して居て、英軍が展開中に之を強襲

するであらう、英軍の右翼列には比較的劣勢なる戦艦が編組されて居たし、英軍には何等豫備兵力なく、其損失は嘗に英國のみならず聯合興國の存亡に關する重大事なる等を顧慮し、遂に左翼展開に決したのだと辯じて居る、ジェリコーが消極的で獨軍の水雷戦を非常に顧慮して居た點は遺憾であるが、當時の氣象等に鑑みればジェリコーの執つた行動は已むを得ざるものとも考へられるのである。

抑々ジェリコーは何故に屈伸不自在なる複列の陣列を以て戦場に進入したか、元來横陣列と縦陣列とは一利一害があつて横陣列は展望良好で敵出現の方向を豫知し得る場合には展開が迅速に行はれ一齊に戦闘力を發揮するに適するが、然らざ

る場合は方向の變化が困難で所要の戦闘正面に展開すること容易でない、縦陣列では之と反對である。

而してジェリコー小隊單位の六列の並縦陣列を用ひた理由は判明しないが、此形隊では各列の嚮導艦の方位線を敵の方位線に直角ならしむる如く指導することが必要で、若し此の如き狀況で展開する場合には各列の嚮導艦の一齊回頭に依り自餘の諸艦は各々其嚮導艦の通跡を進み、其實施頗る容易で迅速に艦隊全砲火を發揮することが可能である。

今優勢なる第二戦艦戦隊を左翼に置いてある艦隊編成の上からジェリコーの意圖を考察してみるに、敵狀から判断し多くの場合南方より東方に互る方面に敵を發見するものと判定し、

小隊單位の六列縦陣を基本とし、各嚮導艦を東西線に保持し、敵狀に應じ一列に展開し、右翼戦闘を以て敵に同航戦を強ひ、一戦で之を撃滅せんとする計畫であつたのであらう。

然し戰場に臨むに當りては如何なる陣列を用ふべきやは天象氣象地形等に依りて決すべき問題で、此海戦に於ては濛氣深く展望不良なりしにも拘らずジエリコーは依然として六列の縦陣を採用して戰場に進入したのは、當時の氣象と敵狀とに鑑み適當とは認め難い、故に其戦闘展開の爲め參戦が遅延したのみならず、又戦闘に際しても味方の戦隊が重疊して、爲めに砲力の發揮を妨げたのは決して偶然ではない。

是れより先き、ビータイ隊と終始連繫行動せる第五戦艦戦隊

は、前續隊の全速東航するに及び、漸く後れ勝となつたが、午後六時六分に至り司令官トーマス少將は左舷前方に戦艦戦隊の右翼小隊のマルポローを發見し、後數分ならずして同小隊全部を認めしも、其餘の小隊を發見せざりしかば、主隊は右翼に展開し、マルポローが全隊を嚮導し居るものと誤解したるを以て、マルポローの先頭に占位せんと決心せしも同六時十八分に至り初めて殘餘の諸艦を認め、ジエリコー隊は左翼に展開せしを知り、當初の企圖たる先頭占位の不可能なるを知り之を斷念し、獨戦艦戦隊の猛射に浴しつゝ轉針し、同六時三十八分ジエリコー隊の殿位に就いた、此回頭中ウァースバイト(第五戦艦戦隊の殿艦)は集中砲火を蒙りて舵機に故障を生じ舷柄一時一方に固着せる爲め、列

外に出で敵方に走るの不得止に至り、益々敵の砲火を受けしも克く危地を脱し、微速力を以て根據地に向ひ、爾後同艦は戦闘に参加しなかつた。

初めジェリコー隊が展開を終り依然南東微東の針路を採り航進を続けつゝありしが、中央に在りし第四戦艦戦隊の第一小队は濛氣を透して、ケーニヒ級及カイゼル級の戦艦巡洋戦艦並に進退の自由を失へる大小巡洋艦を攻撃し、旗艦アイヨン・デュルクは午後六時三十分に至り距離一萬九百七十米突にてケーニヒ級の一戦艦を砲撃し有効なる命中弾を得たり、其他の諸艦は主として濛氣の間に隠見する巡洋戦艦及巡洋艦を砲撃しつゝありしが、漸次獨軍に離隔するを以て、午後六時五十分各小队

毎に一齊に南に變針、再び六列の並縦陣となりて敵に近づかんとした、午後六時五十四分マルボローは其右舷側(前部水壓機室)に魚雷を受けて艦體傾斜せしも尙十七節の速力を保持しつゝ、依然隊列中に在りて戦闘を繼續し、ケーニヒ級の獨艦を猛撃して列外に出でしめた時に濛氣益々深く風向は西南西にして其力三米に及んで居た。

此時英軍主力の先頭に占位せし第二戦艦戦隊は午後六時三十分より七時二十分までカイゼル級若はケーニヒ級の戦艦數隻と戦ひ、尙大損害を蒙りて落伍せしと覺しき一巡洋戦艦を砲撃した、

英軍は午後七時五分更に南西微西に變針した、變針後間もな

く午後七時十四分頃英軍に於て獨の數艦を視認するを得しが當時獨軍は單縱陣にして其針路南微西なりしものゝ如く、旗艦アイヨン・デユークの左舷艦首に當り獨潜水艦を發見し、次で同七時二十三分獨の一水雷戦隊が同じくアイヨン・デユークの南五十度西に當り接近し來るを認め、左二點の變針を行ひしも、之を回避するに不充分なりしかば、更に左二點の變針を行ふた、而して此運動の爲め距離は更に千六百米突を増加するの已むなきに至つた、依て十分後には原針路に復した、同七時二十五分獨驅逐艦現はれしも、英の第四輕巡洋艦戦隊は之を撃退した、而も獨軍は濛氣と砲煙と煤煙とを利用して約八點の變針を行ひ遂に英軍より離脱した。

英軍は午後七時三十三分左轉して單縱陣列となり、南微西に向ひ、次で同七時四十一分南西に正面を變じたるにピーテイ隊より獨軍はピーテイの旗艦ライオンより北西微西約十乃至十一哩に在り、ライオンの針路は南西なる旨の報が有つた、當時ジエリコー隊よりは濛氣の爲めライオンを視認する能はざりしも、ジエリコー大將は其位置はジエリコー隊の先頭約五六哩と推定したので、午後七時五十九分各隊一齊に西に變針し、之に近づきしも敵を發見せず、午後八時二十一分南西に變針し、同二十五分北西に向ひ、同三十分左轉して單縱陣列となり、南東に定針し、同九時南に變針した。

合同後に於けるピーテイ隊の行動に就て詳述せんに、同隊は

午後六時五十分北々西三哩に在りしジエリコー隊の前方を航過すると同時に、十八節に減速し、第三巡洋艦戦隊フォード隊をして後尾に就かしめ、時々濛氣の間に隠顯する敵に對し攻撃を續行した、午後七時より七時十二分に至る間漸次南西微西に變針獨軍に觸接を圖りありしが、七時十四分巡洋艦二隻ケーニヒ級と見えたる戦艦二隻を約一萬三千七百米突に發見し、折柄展望の良好なるに乗じ、速力を二十七節に増加し之と交戦した、午後七時三十二分針路南西に變じ速力を十八節に減じ、獨戦艦を北西微西に望む頃より、砲火の威力漸く現はれ、獨軍の一艦火災を起し他の一艦は落伍せるものと如し、此時恰も獨軍の前方に在りたる驅逐隊は南西微風に乘じ夥しき灰色の煤煙を揚げ

主隊は此煙幕を利用して回避し、同七時四十五分其艦影を沒せり、是に於てビロタイは第一及び第三輕巡洋艦戦隊に西航索敵を令し、之が後援として八時二十分西方に轉針航行中、幾もなく巡洋艦及戦艦各二隻を發見し、約九千四百四十米突の近距離にて激戦を交へた。

此交戦中第二巡洋艦戦隊は第一巡洋艦戦隊の殘艦デューク・オブ・エヂンバラ(他二隻前に沈没せり)を合せて戦艦艦隊の前方に占位し、同艦隊とビロタイ隊との連鎖たりしが、遂に交戦の機會を得なかつた、第四輕巡洋艦戦隊は戦艦艦隊の前方に在つたが、午後七時二十分及八時十八分の二回第十一水雷戦隊を助けて獨驅逐艦を邀撃し、其四隻を撃沈した、次いで獨戦艦を襲撃し、八時四十

分カイゼル級の一艦に一大爆發の起れるを見た。

兩軍主力の戦闘は午後六時十七分英軍第一戦艦戦隊と獨軍第三戦隊との砲戦を以て始まり午後八時二十分に至るまで約二時間に互れり、恰も展望不良であつた爲戦闘は間歇的に彼我相見る毎に行はれ距離は概一萬九百七十米突乃至八千二百三十米突の間を上下した。

此間英軍は終始敵に近づかんとして南東微東乃至西に數回變針したが、獨軍は絶へず之を回避し驅逐艦の強襲と煙幕の用に依り只管決戦を避けんと努めた、此の如くして兩者速力の優劣差あるが爲め數次の變針に依りて不規則なる同心圈上の對勢を描出し初め英軍は獨軍の前方有利の位置を占め在りし

も終戦期には却て獨軍の後方不利の位置に立つに至つた、併し英軍は獨軍と其根據地との中間に在れば其退路を遮斷し得べき戰略上有利の位置を占むることを得た。

午後十時四十一分英海軍省はジェリコーに次の如き緊急電報を發した、曰く獨軍主力は午後九時十四分歸港命令を下しヒツベル隊は後衛となり針路南々東四分の三東速力十九浬にて南下しつゝありと、此重要なる電報はビィテイ隊に於ては受信しなかつた、六月一日午前三時二十九分今は時既に遅く英軍はホーン・リーフより三十三浬あるのに獨軍は僅に十二浬と推定されたから之をホーン・リーフへの歸途を遮斷すること到底不可能と判断した。

第十三章 夜 戦

濛氣と暮靄の裡に敵を逸した英軍主隊は再び一漕の間隔を有する並縦陣列を制り、水雷戦隊を後尾に従へ、獨驅逐艦の襲撃に對する警戒を嚴にしつゝ、午後九時南微東に變針し、速力十七漕にて南下した、其目的は獨軍と其根據地間に在りて其退路を遮斷し、翌朝を期して之と交戦せんとするに在つた、其夜の警戒航行序列は次の如くである。

ピートイは獨軍は北西方に遁れ、英軍は獨軍と其根據地との間に在りと推定したので、此際夜暗を冒して敵に近接するの冒險に出るよりも、寧ろ翌朝を期し、有利なる情況の下に獨軍を發

見する方が有利なりと考へたので、ジェリコーの希望に従ひ、南微東に變針し、主隊と並航して南下した。

此くて英軍は南下を續くること約五時間で、翌六月一日の午前二時四十五分頃に至りて引返した、此南下中英軍主隊は一度も敵襲を受けなかつたが、主隊と行動を共にした輕巡洋艦及驅逐艦は屢々獨軍を發見し、激烈なる夜戦を交へた。

其梗概を述べれば、英軍主隊の後尾にありたる第一輕巡洋艦戦隊は午後十時二十分巡洋艦一隻輕巡洋艦四隻より成る獨軍を認め、約十五分間激烈なる接戦を交へ、サウザムブトン及バミングハムには多大の死傷者を生じた、又第四第十一及第十二水雷戦隊は屢々獨軍を襲撃したが、其効果は不明で、英公報には

第四水雷戦隊の旗艦チツペラリーは大損害を受け沈没し、敵の一驅逐艦を撃沈したと述べて在る。

ピーテイ中將麾下の第十三及第一水雷戦隊は戦艦艦隊の後尾に在つたが、六月一日午前零時三十分高速力にて其後方を通過せる一大艦の照射を受け其一艦を失ふた、午前二時三十五分他の一艦ドイツチランド級戦艦四隻を襲撃し、午前三時三十分チャムピオンは獨驅逐艦四隻を發見攻撃した、第一水雷戦隊は單獨疾走中なるカイゼル級戦艦を襲撃した。

水雷敷設艦アブデールは完全に其任務を果したりと稱するも、其行動及敷雷の効果は詳でない。

獨軍は輕艦隊を以てする夜襲を企圖すると共に英軍の夜襲

を豫期し、其一部を後方に從へて敵の邀撃に備へつゝ、ヘルゴラント島に向針した。

然るに急航して獨軍の前方に進出した英軍は、襲撃に最も有利なる反航針路を取りて獨軍に肉迫し、展望不良なる當夜の天候は敵の攻撃を一層容易ならしめた。

夜
午後十時過エルピング及ハムブルグはアレシユイサ級の輕巡洋艦と交戦し大損害を與へて之を走らし、午後十時三十分頃第四偵察戦隊の舊式輕巡洋艦は優勢なる英軍と衝突し、輕巡洋艦フロイエンローブは雷撃を受けて沈没した、午後十一時より午前一時に互り、第一戦隊は數回の襲撃を受けた、獨軍は探照砲撃を以て之を迎へ驅逐隊嚮導艦一隻(〇〇)を撃沈し、驅逐艦四隻

を撃沈し、七驅逐艦に大損害を與へた、英艦チツペラリー及ターブエレントが最後を遂げたのは實に此時である。

此戦闘中午前零時十五分クレツシー型の英装甲巡洋艦一隻獨主隊の傍一千米突に現はれたが、猛火に浴し大火災を起し、四分時の後爆沈した。

獨軍に在りては輕巡洋艦エルピングが他艦と衝突して大損害を受け、ロストクと共に乗員を救ひ、艦體は之を遺棄した。

英軍は獨軍の進路に機雷を敷設し、獨驅逐艦一隻は之が犠牲となつた。

損傷艦ルユツツオウは他艦と行動を共にして居た、而してポムメルンは拂曉頃雷撃を受けて沈没した。

此夜獨驅逐艦は遂に英軍主力を襲撃する機會を得なかつた。六月一日午前二時三十九分ジエリコは英軍はホーンリーフより三十三哩の距離に在るのに、獨軍は僅に十二哩しか離れて居らぬから到底之をホーンリーフへの歸途を扼するのは不可能だと判断した。

同午前三時二十九分海軍省よりの最後の情報は獨軍は、ホーンリーフ燈臺から十七哩に在りて英軍を距ること二十三哩である。

午前四時七分に至るまでビータイは獨軍の針路が南東なりしことを知らず、依然西方なりと考へて居た。

之より先き、ビータイは輕巡洋艦バリーミングムが五月三十一

日午後十一時三十分に獨巡洋艦隊が西南西に駛走しつゝありしを發見したとの報を得たので彼が英ビィテイ隊は尙獨軍と其根據地との中間に在りとの彼の所見を強固ならしめた。故に敵軍は前夜は英軍の後尾に横過索敵しつゝあつた、拂曉ビィテイ隊は尙ホーン・リフより十六哩に在つた。

第十四章 六月一日の行動

六月一日黎明英軍はヘルゴランド北方の獨軍の水雷敷設面に近づいたが、獨軍を發見しなかつたので、更に北上索敵し、併せて味方巡洋艦及驅逐艦を收容する爲、午前二時三十分頃北緯五十五度東經六度附近に達し、反轉して北上した、此日早朝には展望三、四哩を出でず、前日より更に不良であつた。

英軍は午前七時過ぎホーン・リフ附近に達し、之より午前十一時迄、或は南し普く戰場附近及獨國諸港に至る航路を搜索せしも、遂に獨軍を發見しなかつたので、ジエリコーは獨軍は既に其根據地に歸還せるものと判断した。

之れより先き午前四時英軍は一隻の獨航空船を認めためたので、約五分間之を砲撃したが、煙霧の中に其船影を没した。

ビーテイ隊はホーン・リーフの南西北緯五十五度附近まで南下した後引返したが其後の行動は明瞭でない。

前日の戦場搜索の結果沈没艦アーデント(驅逐艦)、フオーチエン(驅逐艦)、及チツペラリー(驅逐艦)の生存者を救ひ、スバローホーク(驅逐艦)は衝突の結果航海に堪へざるを發見したので乗員を收容して之を沈めた、戦場には夥しき艦材破片の漂流して居るのを認めたが遂に敵艦を發見しなかつた。

午後一時十五分ジエリコーは獨軍の歸港は最早疑ふの餘地なきものと断定し、全軍を率ゐて歸途に就き六月二日午前各其

根據地に歸投した、而して曩に損傷を蒙りて列外に出で歸途に就けるワースバイトはロサイスを距る約三時間の沖合に於て獨潜水艦二隻の襲撃を受けたが無事歸港した、マルボローは損傷の爲艦隊速力の維持困難なので午前二時三十分司令官(ネバ)は將旗をリヴェンジに移し、同艦はハムバーに向ひ回航中ドガバンク附近で獨潜水艦の襲撃を受けたが無事歸港した、又五月三十一日に運動不能となつたウォーリアーは飛行機母艦エンガーダイン之を曳航し六月一日午前七時十五分に及びたるも天候不良の爲曳航を斷念し、之を遺棄するの已むを得ざるに至つた、多分沈没したのであらう。

獨軍の行動に就てシェーアに従へば六月一日午前三時獨軍

主隊はホーン・リーフ附近に達し後れたるリュッツォウを待合さんと決心した、之れより先き五月三十一日午後九時三十分以後十二哩の速力にて航行に堪ゆとの報告あり、後五月三十一日正子頃護衛の驅逐艦G第四十號よりリュッツォウは航海至難となり微速力にて南進しつゝありとの報告があつたのが最後で、六月一日午前三時三十分には同艦は午前二時放棄せられたとあつた。

兎に角英軍の主隊及輕快部隊が何れも北方より來襲しなかつたことは明白で、特に驅逐隊は拂曉近くまで觸接を保持して居たに拘はらず、今は一隻も其姿を認めざるより考ふれば英軍は退却せしものと判断したと。

六月一日早朝の偵察任務に服する爲め航空船L第十一號第十三號第十七號第二十二號及第二十四號は夜間飛翔したが、午前三時十分になりL第十一號から戦艦十二隻小型艦多數及驅逐艦より成る英軍がテルセリングとホーン・リーフとの連絡線の中央附近を北上して居るとの報告があつた、次で間もなく右英軍の北方に當り別に戦艦及巡洋戦艦數隻より成る他の英軍を認めた旨報告があつた。

五月三十一日正子少し前頃四隻の航空船は、ヘルゴランド島の北西より西方に於て獨軍の翼側を掩護せよとの命に従ひ、航空船L第二十一號はノルドホルツを出發した、當時風向は南西で海面に近く濛氣があつたが次第に上空に擴張し來り展望不

良となつて終にはヘルゴランド島を視認すること不可能になつた、午前三時北方〇三三及B地點(獨軍の特設地點にして不明なり)に煤煙を發見したので之に向ひ變針し、同三時十分大戦艦十二隻輕快艦艇多數を伴ひ全速力にて北々東に航進中なる英軍の一隊を認め其後尾上空に續行して敵狀を報告して居たが、同三時四十分其北方に戦艦六隻及輕快部隊より成る他の英軍の一部隊が北航するを認めたが、英軍は間もなく各戦隊の列向變換を行ひ西方に向ひ他の英軍の第一部隊に合同せんとした。

午前三時五十分北東方に當り英巡洋戦艦三隻及小型艦四隻は獨航空船の南に向て航進し、獨航空船と英軍主隊との中間に入る如く行動しつゝあるを發見したが、展望不良で大概同時に

英軍の一部隊を認め得るに過ぎざりしに反し、一千百乃至一千九百米突の高度に在りし航空船は英軍では明瞭に認められたであらう。

其れが爲め猛烈に英軍の射撃を受けたが命中弾はなかつたが尙一層距離を増加した方が有利と認め、英軍の砲撃は午前四時三十分迄續いたが、南西方近距离に在つた英巡洋戦艦の砲火を避くる爲め北東方に避けなければならぬ様になり遂に敵を見失ふた。

其他航空船は縦横に飛翔偵察を試みたが敵を發見するに至らなかつたが、午前三時シエーアより航空船に歸還を命じたので夫々歸途に就き正午頃ノルドボルフに著陸した、而して艦隊

も歸途に就き日没頃皆河口に入港した、シエーアは此の第一部隊は海戦の報に接し英吉利海峡に在つた一隊が進撃し來るものと判断して居つたが、第一偵察艦隊は重要な戦闘に参加する能はず、且第三戦隊の先頭艦も彈藥の殘額が缺乏して居り快速巡洋艦の内フランクフルト、ピラウ及レーゲンスブルグの三隻のみ使用に堪ゆる状況であつたので、當時の天候で空中偵察のみに信頼するは危難と信じたので、戦闘を斷念しシエーアは全軍に歸港命令を發した。

第十五章 戦 果

此の如くして海戦は局を結んだ、然るに獨國政府は自己の損害は喪失艦艇數に於て

巡洋戦艦 一隻 (リュッツオー)

弩級前戦艦 一隻 (ボンメルン)

輕巡洋艦 四隻 (ウイスバーデン、エルピング、ロストツク、フロウ
エンロフ)

驅逐艦 五隻

以上排水量合計六〇、七二〇噸なるに英軍の喪失艦艇は

弩級戦艦 一隻 (クキン・エリザベス型)

- 巡洋戦艦 三隻 (インデファチゲブル、グキン・メリー、インウキ
ンシブル)
- 装甲巡洋艦 四隻 (デフェンス、ブラックプリンス、ウァーリョーア、
クレツシー型一隻)
- 軽巡洋艦 二隻
- 駆逐艦 一三隻
- 巡洋戦艦 三隻
- 装甲巡洋艦 三隻
- 駆逐艦 八隻

の多數に上るが故に勝利は獨軍に存りと、之に對して英國政府は英軍の喪失せるものは

なるも、獨軍の損害は多大にして其公表せし以外に左の如く

- 弩級戦艦 三隻 (内二隻は沈没に垂んとし一隻は
歸港不可能の程度に大破せり)
- 巡洋戦艦 一隻 (歸港不可能程度に大破せり)
- 軽巡洋艦 一隻 (大型にして戦艦なりしやも知れず
沈没に類する状態なりき)
- 駆逐艦 四隻 (大破損歸港不可能ならん)
- 潜水艦 一隻

あるが故、且つ又獨軍は勝利を得たりと稱するも、海上の管制は依然我軍の手中に存するが故に勝利の榮冠は無論英軍の頭上に在り、皮肉なる英海相バルフォアは獨國は勝利を主張するも、勝利は勿論英國側に在り、若し獨國にして此の如き勝利を再びするならば終に其海軍は全滅するに至るべしと。

此の如く砲雷の戦は變じて筆舌の争となれり、而も英獨兩軍共若干の損傷を受けながら、互に其勝利を主張するは恰も腕白なる少年が互に喧嘩を爲して頭に瘤を顔面に擦傷を負ひながら、其勝利を主張する狀に鬚鬚たり、戦争當時は國民の士氣に關するが故に自軍の損害を隠蔽する必要ありしも、戦後の今日に於ては其必要は消滅し自然に暴露するに至つた、今之に據り兩軍の有形的戦果を計上すれば實に左の如くである。

英軍の損害

艦種	艦名	損傷程度	時刻(期)	状況摘要
巡戰	クキン・メリ	爆沈	砲戦開始後約三十分	第二砲塔附近に重砲の齊撃を受け、上部火薬庫に大爆發を起し、艦體は吹上り、了れて兩部に切斷し、數秒にして沈没した。重砲の集中弾を蒙り、數分にして爆破の如し、後數十分にして沈没せるも、破損の集積は、後數十分にして沈没せるも、五〇〇噸内外の近距離にて重砲の集積を蒙り、先づ大火災を起し、續て中火薬庫の爆發に依り、瞬時に沈没せり。
巡戰	インデファチ	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。

巡戰		甲巡		甲巡		甲巡		巡戰		巡戰									
艦種	艦名	損傷程度	時刻(期)	状況摘要	艦種	艦名	損傷程度	時刻(期)	状況摘要	艦種	艦名	損傷程度	時刻(期)	状況摘要					
巡戰	クキン・メリ	爆沈	砲戦開始後約三十分	第二砲塔附近に重砲の齊撃を受け、上部火薬庫に大爆發を起し、艦體は吹上り、了れて兩部に切斷し、數秒にして沈没した。重砲の集中弾を蒙り、數分にして爆破の如し、後數十分にして沈没せるも、破損の集積は、後數十分にして沈没せるも、五〇〇噸内外の近距離にて重砲の集積を蒙り、先づ大火災を起し、續て中火薬庫の爆發に依り、瞬時に沈没せり。	巡戰	インデファチ	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。	巡戰	ブル	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。	巡戰	ブル	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。
巡戰	クキン・メリ	爆沈	砲戦開始後約三十分	第二砲塔附近に重砲の齊撃を受け、上部火薬庫に大爆發を起し、艦體は吹上り、了れて兩部に切斷し、數秒にして沈没した。重砲の集中弾を蒙り、數分にして爆破の如し、後數十分にして沈没せるも、破損の集積は、後數十分にして沈没せるも、五〇〇噸内外の近距離にて重砲の集積を蒙り、先づ大火災を起し、續て中火薬庫の爆發に依り、瞬時に沈没せり。	巡戰	ブル	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。	巡戰	ブル	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。	巡戰	ブル	爆沈	砲戦開始後約十五分	重砲命中、火薬庫に大爆發を起したるもの如く、爆煙の收まりたるときは艦體全部沈没し、去りて痕を止めず。

隻隻隻		二三三五		艦艦艦		戰戰戰		損	
驅	驅	輕巡	輕巡	輕巡	戰	巡戰	巡戰		
デフエンダー	オンスロー	チエスター	パーミンガム	サウザンプト	マルボロー	タイガー	ローレンセス		
落伍	落伍	大損害	大損害	大損害	落伍	一砲塔不能	一砲塔不能		
第二期戦の終期	兩軍主力衝突前	夜戦			兩軍主力衝突の初期	?	?		
非戦側に随伴中敵弾命中前破壊損速力十節に減じオンスローを曳航	敵艦襲撃の際損害運轉不能	フツド少将の命を受け前方に進出偵察中三四隻の輕巡洋艦と會戦す死傷九十餘内戦死三十六	サウザンプトと同一状況の下に戦ひ晝間二弾夜間二十餘弾を蒙る	敵大艦隊と接戦し大小十數弾を蒙り乗員の約三分の一を失ふ	魚雷を受け外底に約三十呎大の破孔を生じ八度傾斜し十七節にて戦闘繼續未明戦列を脱し歸港	敵艦連續襲撃の際右舷艦橋下に穿貫	一大口徑砲弾砲塔に入りて炸裂し砲塔を殺し裝薬を引火したる爲富該火薬庫に満水、別水線に巨弾一發命中	能ならしめたり	大口徑砲弾命中五ヶ所、其一弾は砲塔の内部に突入し旋廻装填を不可大破片内部に突入し旋廻装填を不可

大		隻隻隻					三三八	
巡戰	戰	驅	驅	驅	驅	驅	驅	驅
ライオン	ワースバイト	タービュレン	スバローホー	フォーチュン	アーデント	チツペラリー		
全一砲塔滅	落伍	沈没	沈没	沈没	沈没	同右		
?	第一期第二期戦	夜襲戦						
塔大口徑砲の命中六箇所其一弾はQ砲塔を貫き炸裂し砲員全部を殺せり天蓋を貫きて下部より閉鎖し無事なるを得たり	大弾痕約二十七、甲板を貫通せるも自由を失ふコンパートメントに浸水あり、戦死九、負傷八〇、戦列を脱し直に歸港	傍艦と衝突沈没		襲撃の際敵火の爲撃沈せらる				
		附近を通過せる大艦の探照砲撃を受け運動不能となり後沈没						

艦種	小損害		大損害	大損害?	大損害?
	巡洋艦	駆逐艦			
巡戦	キヤリオープ	コロッサス	オンスロー	クリストファ	アカスタ
巡戦	ニュージーラ	コロッサス	オンスロー	クリストファ	アカスタ
巡戦	ニュージーラ	コロッサス	オンスロー	クリストファ	アカスタ
巡戦	ニュージーラ	コロッサス	オンスロー	クリストファ	アカスタ
巡戦	ニュージーラ	コロッサス	オンスロー	クリストファ	アカスタ

獨軍の損害

艦種 艦名 損害程度 時刻(期) 状況摘要

巡戦 ルッツオウ 沈没 午後十時頃 水線甲板を破られ海水浸入

次に英獨人員の死傷を比較すれば左の如くである。

戦死	負傷	沈没	戦死	負傷	沈没
士官以上	三三三	一七二	英	獨	
下士官兵	六一〇四	二四一四			
同	V四	同	同	同	同
同	V二九	同	同	同	同
同	V二七	同	同	同	同
同	V四八	同	同	同	同
同	フラウエンロープ	同	同	同	同
同	ロストツク	同	同	同	同
同	エルビンダ	同	同	同	同
同	ウイスバーデン	同	同	同	同
同	ボンメルン	同	同	同	同
同	ポンスメルン	同	同	同	同
同	ウイスバーデン	同	同	同	同
同	エルビンダ	同	同	同	同
同	ロストツク	同	同	同	同
同	フラウエンロープ	同	同	同	同
同	V四八	同	同	同	同
同	V二七	同	同	同	同
同	V二九	同	同	同	同
同	V四	同	同	同	同

士官以上
下士官兵

五一
五一三

四一
四四九

前述のものを採て考ふるに何れを勝とし何れを敗とすべきや全然不明であるのみならず、兩軍共海戦の目的を達して居らぬ、古來海戦と名のある海戦はチャイヴァイスのセント・ヴキンセント沖でも、ネルソン提督のナイルでも、トラファルガー等は勿論我國民の記憶に在る伊東中將の黄海の役(日清戦争)でも東郷大將の黄海々戦、日本海々戦、上村提督の蔚山沖海戦等に至るまで海戦とは必ず一方は大捷利で他方は惨敗である、然るに現代の海軍國中一二を争ふ英獨兩國のジユトランド海戦が勝敗不明、有耶無耶に終つたのは何故か、是れ吾人が言はんと欲する處

で又諸君の聽かんと欲する處なるべし、曰く艦艇兵器の精粗なるが爲めか、否機力の關係に非ざるなり、諸種の戦技に優劣なきが爲めか、否機術の關係に非ざるなり、否全く兩者の心術如何に依るなり、之を具體的に云へば勝敗の差の無かつたのは物質的問題でなく、さればとて技術的問題でもなく、全く精神的の問題換言すれば兩軍特に物質的に優勢なりし英軍に於て攻撃精神が旺盛でなかつた爲めだと斷定して差支ないと思ふ。

往昔英國が佛蘭西の諸國と海上に覇を争ひし時代に於ては佛國海軍の打算的なるに反し、英國海軍の敢行的なりしは顯著なる事實で、此敢爲不退轉の金剛心が其海軍軍人を支配したるが故に遂に今日の盛大を致したる所以である。

第十六章 海戦餘録

ジユトランド海戦に就ては前章までにて盡したりと信ず、而して前數章に記述せる事項を調査し研究しつゝある際、圖らずも此海戦に關し將來の參考となるべき事項を隨所に發見し、之を採録したのもあるが又せざるのもあり、さりとて全然之を捨て去るに忍びないから、本章に一括して之を収録した。

一、消耗兵器

獨軍の消耗兵器はフォン・シエーアに従へば次の如くである。

- 重砲彈 三、五六五發
- 中口径砲彈 三、九二一發

英軍のものを公文書に就て調査せるに沈没した軍艦は致し方ないとしても、終始奮闘しつゝあつた軍艦で報告のないものがある。
今有りの儘を計上すれば左の如くである。

- | | | |
|--------------------------|-------|------|
| 第一戦艦戦隊 | 重砲彈 | 八二九發 |
| | 中口径砲彈 | 三五七發 |
| | 魚 雷 | 三發 |
| 第二戦艦戦隊(エリンよりの報告を欠く) | | 二二九發 |
| 内キングジョージ五世は | | 九發 |
| エジャツクスは | | 六發 |
| 第四戦艦戦隊(ローヤル・オークよりの報告を欠く) | | 四八〇發 |

以上はジエリコー隊のみであるがピーテイ隊の方は次の如くである。

巡洋戦艦艦隊 <small>(沈没三艦及タイガ1の報告を欠く)</small>	一、二二八發
内ライオン	三二一發
ニュージイランド	四一六發
プリンセス・ローヤル	二三〇發
第五戦艦艦隊 <small>(ウアイアスバイト及マレイヤの報告を欠く)</small>	五六三發

二、魚雷の命中數

魚雷の發射數に就ては不充分なれども前述以外には知るを得ない、獨軍は一〇七發を發射したと云ふが雷撃を受けたのは第一戦艦艦隊の旗艦マルポー一隻しかない、三十一日の午後七時二十分の襲撃には二十二發を發射したと稱せら

るゝが一隻も命中を受けて居らぬ。

翻て英の發射數を計上すれば公文書には七十五發とあるが其中三十五發は晝間戦闘の場合で僅に二發命中で殘餘の四十發は夜間に屬する、而して雷撃を受けて沈没したのは夜間に舊式戦艦ボンメルン及舊式巡洋艦フラウエンロブの二隻だけだ、英獨兩軍の發射魚雷數は合計百八十二隻であつたが命中したのは三隻のみだ、之は兩軍共回避が巧妙の爲めよりも餘り遠距離から發射した故だ、前述の戦記を熟讀すれば直に首肯せらるゝ如く兩軍共近くて一千米突遠いになるのと七千米突位から發射して居る、水雷戦術は要するに肉薄戦術だ魚雷を發射したことを知つてから如何に巧妙に轉舵回

避しても到底免るることが出来ない位まで接近して雷撃せなければならぬ、是に因て之を觀れば此海戦は流石富強の二國の戦だけありて魚雷の濫費戦であつた。

魚 雷

海軍將校並海軍技術家は熟れも戦訓に多大の興味を有するは宜しいが、克く注意して其眞理に適合するや否やを識別するのが緊要だ、砲塔の改良火薬庫防護の必要事項に關しては異論の餘地ないが、大艦攻撃に於ける魚雷の價値の如き原則に互る事項に就ては這次海戦其自體の事變を外にしても又之より起る事變に關しても幾多の疑問の發生を免ることは出来ない、乃

ち魚雷は果して該事變の原因なりしや否やと云ふことである、吾人は日々聞くに將來に於ける魚雷は航空機より或は潜水艦より發射せらるゝかを問ふを要せず、凡て超弩級戦艦を破毀せずんば已まざるものある可しとの言を以てす、然れども吾人は第十九世紀初頭に於ても之に類したる説の行はれしを見且日露戦争に於ても此種の論を耳にしたるも其今日に齎らしたるものは奈何、努級艦の出現となり魚雷は依然として昔日と何等其容積の變化を示さない、吾人は須く偏見を去り虚心坦懷本公文書中の統計表に全然信頼し魚雷の果して如何なる効果を齎らしたる乎を考慮す可きである、獨逸側に於ては雷撃數實に一〇七發を算したりとはフォン・シエーアの是認する所である、然

るに何事ぞ此中一發の撞撃を蒙れるもの僅かに戦艦マルポロ
 ー一隻に過ぎない、而も同艦は要部を外れたる爲め依然として
 翌早朝に至る迄戦列に在りて其位置を保持した、午後六時及午
 後六時三十分降りて午後七時二十分の獨驅逐隊襲撃は一とし
 て英艦に損傷を蒙らしめたるものがない、午後七時二十分の襲
 撃には、二十二發の魚雷發射を行ふた、又英の雷撃數約七十五發
 に達すとは公文書の示す所で其中三十五發は晝間發射に係り
 二發の命中を來し、夜間の四十發中少くとも四乃至五發の命中
 を得た、本來魚雷攻撃の決行は晝間を以て理想的と爲す、當時彼
 我參戰の艦艇二六〇隻の多數に上り彼我の雷撃數一八二發に
 達した、此中八發の命中即ち四パーセント四を算したるものと

信ぜられたが實際魚雷に觸れて沈没したるものは僅に舊式戦
 艦ボンメルン舊式巡洋艦フラウエンロブ及新式巡洋艦ロスト
 ックに過ぎない、此等は熟れも夜間二十一吋型の魚雷に襲撃
 せられたるものである、若しリュツォー及エルピングの兩艦も
 沈没せりとせば其は雷撃に基因せるものと斷ずるは不可能で
 リュツォー臨終に際し味方たる獨逸側の魚雷一發を蒙り死期
 を早めたるは事實なるも實は英砲火によりて撃沈せられたる
 ものである、若し夫れエルピングの損傷に至りては其僚艦ポー
 ゼンと衝突の結果のみ、フォン・シエーアの報告によればロスト
 ック、エルピングの兩艦は遺棄せられて洋上に浮びしも遂に英
 艦隊の見ゆるや蒼徨獨逸側自ら之を爆發せしめたるもので唯

的確に魚雷而已に基因する沈没艦は獨りボンメルンとフラウ
 エンロブに過ぎない、此等の事實を釋明せんと欲するものは宜
 しく英公文書に就て之を見よ、噫戰闘に従事する事十二時間、之
 に参加せる艦艇二六〇隻、魚雷發射數一八二發而して雷撃の犠
 牲と化したるもの驚く勿れ僅々二隻而も参加艦艇中最舊式に
 屬するものならんとは。

砲及装甲板

砲術上の教訓は幾分隱蔽せられて之が眞諦を捉ふること不
 可能で就中砲火指揮に關するものに於て然りだ、然れども若干
 重要事實の暴露を來せるは一點の疑念を挟む餘地がない、其最

顯著なる教訓は攻撃及防禦に對し夫々割當られたる主力艦排
 水量比率を規定す可き標準に關するものだ、ジェリコ元帥は
 忌憚無く陳述するに英巡洋戰艦の沈没は其貧弱なる装甲防禦
 就中砲塔装甲及甲板防禦の貧弱に基因すと云ふて居る、假令砲
 力に於て優るとも不適切なる防禦性を有する艦船は到底適切
 なる防禦性を有する艦船に匹敵するに足らざるはジユトラン
 ド海戦之を明示して餘縊がない、而も此點に於て詭論の生ずる
 無きを保し難きものあれば注意を要する、乃ち若し英にして獨
 の發砲後直に或は之より先きに齊射に全力を傾け獨に命中彈
 を蒙らしめたりとせば、クキン・メリー及インデファチガール
 の兩艦は沈没を免れしならんとの説を爲し或は十三吋半の重

彈三四發を同時に發射せば獨巡洋戦艦の攪亂期して待つ可かりしなりとの説を爲し英砲力の劣弱を批難するものなきを保せず、然れどもデルフリングル砲術長フォン・ハーゼは英の發したる重彈一發は見事に其司令塔に命中せるを記録すれども其及ぼせる被害を記す所が無い、英砲力問題に關する賛否の論は殆んど其底止する所を知らない、今後暫く繼續して議論の基礎となるならん、ジェリコー元帥述べて曰く、最善の防禦は強烈なる攻勢を採るに在りとは戰略上の眞理となすも之を物質上に應用せば詭論たるを免れないと、若し、サー・ウィリアム・ホワイト時代の防禦甲板を有する巡洋艦にして今日の戦闘に従事せば其結果如何、何人も之を知らんと欲する所であらう、彼我同齡の

艦船の装甲及防禦に當てたる排水量比率を見るに其差異著しきものがある、此事實はクキン・メリーの二十三パーセントに對しサイドリッツの三十パーセント九、オラオンの三十二パーセントとなるに比しカイゼルの三十五パーセントなるに徴して明かである、現にフツドの如きは僅に三十三パーセント五に過ぎざる有様である、此等の比率と雖も全部艦船に就て示せるものに非ずして只其一部に過ぎない、インデファチガールは初め三發の命中彈を受け其砲彈は孰れも後砲塔に近き上部甲板に貫通し後砲塔架を繞る装甲に突當りて爆裂したのである、而して其装甲の厚さは僅に八時に過ぎず、貫通の眞否確かならずと雖も、一報告に依れば命中による爆裂は小にして火薬庫の破

裂はクキン・メリーの艦内に発生したるものに同一の原因ではないらしい、ニウ・ジランド座乗ベケナム少將の報告書中次の一項がある、チャット・フィールド艦長の陳述に曰く、同艦は明かに火薬庫爆裂によりて爆沈せるものなりと、生存者何名ありや報告に接せざるも一般の證人は火薬庫の爆發を確信すと第二回の齋射A砲塔附近に爆裂を來し全艦の破毀を見るに至つた、舷上の兩艦は孰れも装甲に缺くるもの少くない、十一吋彈齊射に對し輕装甲は何等の用を無さず、而も重装甲と雖も一時一發を防ぐを得可きも二三回の齋射に對しては殆んど抵抗力が無いらしい、英の齋射は獨に比し遙に散布界大なりしを以て之に伴ふ效果を得る所がなかつた。

英巡洋戦艦の装甲に對する批難に關して極めて明瞭に了解を要する一事がある、何ぞや曰く、批難者流は何等甲鉄の抵抗性に想到せざる事である、甲鉄の點に於て英艦は單に列國の艦に比し優良なるのみならず寧ろ超絶するものある事を信ずる理由あるのみに止らず尙一步進めて之を實證するに足る證憑の存在するものがある、然れども世上甲鉄と甲鉄の位置との差別を爲さざるものがあり、或は甲鉄の厚さを考察せず、或は甲鉄の抵抗性を齎す爲適切なる裏鉄の必要を了解せざるものあり、今一巡洋戦艦に就て見るに帶^{ベルトプレート}鉄中の一個は穿孔を見ざるのみならず凹痕をも留めずして全部一面に舷内に陥入したるものあり、ライオンに於ては一彈の銳角をなして降下しX砲塔の後

部甲板を貫通せる爲非敵側に於る装甲帯は甲鉄の比較的軟弱なる裏面に於て打撃を蒙り鉄其自體は舷外に突出せられて居る、現代装甲は此種攻撃に耐ゆる施設を有せない此の場合に於ては甲鉄は穿孔を生ぜず其裏面に相當凹入して其對側に於ける硬面に甚だしき龜裂を示して居る、若しライオンにしてクキン・メリーの如くQ砲塔に損害を被りをらんには瞬時に爆沈を免れざりしならん、午後四時一重弾はライオンに命中し其砲塔の天蓋を吹飛ばし砲室を全然破碎して火災を起さしめた、此後間もなくインデファチガールは撃沈せられ午後四時二十四分クキン・メリーは爆裂して其影を没した、降りて午後四時三十分頃豫てよりライオン砲塔内に餘燄を保ちたる火の手は揚

彈藥筒に在りし裝藥に點火し火藥庫員及彈庫員の全部を燒死せしめた、然れども火藥庫の扉は既に密閉せられたから慘憺たる爆發を免れ必然的轟沈より救はるゝを得たのだ、然るにクキン・メリーに至りては稍其趣を異にするものあり、同艦の一重弾命中を受けたるは午後四時二十分右側砲—Q砲塔—は其用を爲さざるに至り、獨り左側砲のみ砲撃を繼續した、然るに午後四時二十四分該砲塔は一重弾の貫通を受け、砲室下の作業室内に炸裂を來して猛火を發したらしい、乗員の將に身を以て逃れんとせるとき火藥庫は轟然爆裂した、蓋し之れ炸裂せる砲彈の作業室に於ける裝藥に點火し此處より火燄は揚^ト彈^ツ藥^ク筒^ノに侵入し其途中恐らく爾餘の裝藥に點火し、加之該筒下の火藥庫扉の

開放ありたる爲火焰は蔓延して益々装薬に移りたるものなる事炳乎として蔽ふ可からざるものがある、然れども銃上三巡洋戦艦の出火は孰れも砲室より發し作業室を経て揚彈薬筒並火薬庫に浸入せるものでは無いらしい、蓋し筒及揚彈薬機は如何なる場合に於ても作業室にて終るが故である、英海軍の装薬は凡そ四分の一装薬四部より成り同時に二部を引揚るものである、作業室に於て之を籠ケイヂに移し、籠は之を砲の後部に運搬し、適當なる防焼板を以て一朝失火の際砲室より作業室に火焰の途を開かしめざる施設がある、然るに此等の特種施設は揚彈薬筒若くは火薬庫扉に之を有せず、されば實際は火焰は作業室より火薬庫に自由に蔓延するを得たのである、此等の薬包にして一度

火焰を引かんか其内包強大だから限局せられたる室内に於て之が消火は到底絶望なるは論外である、クキン・メリーの前方二鍵を距りたるタイガー艦長ベリー大佐の曰ふ所によれば同艦長はクキン・メリーはQ砲塔の正横に齊射を受けたるを目撃したと、然らば同艦甲板は轟進し來れる敵弾によりて粉碎せられ其弾片は作業室を繞る装甲を貫通したるも舷の上部―非防禦部―を貫通し來らざりし事は明白である。

命中彈及不命中彈

インヴァインシブルの轟沈は前述のものとは異なるものがある、其砲術長は明記するに一彈はQ砲塔を撃ち内部に炸裂して天

蓋を吹飛ばし殆ど瞬間に艦の中央に一大爆発を生じQ火薬庫の爆裂せるを指示し而して艦は兩斷せられ、十秒乃至十五秒にして沈没したと云ふ、此場合に於ては砲室内に於ける爆発の火薬庫に及びたる事一點の疑を挟む餘地が無い此等の四艦喪失により學ぶ可き主要教訓は外部の砲塔防禦力を増進し作業室及揚弾機に於ける對火焰施設の改善及彈藥供給の速度を鈍らしむる事無く換装室と火薬庫との隔離を行ひ、加之浸入火焰に對し火薬庫の水平防禦の度を増加する事である、此等の教訓は實に重大なるものだ、ライオンの受けたるは致命彈は僅に一發でインザインシブルも亦同様である、而して爾餘の二艦のみ齊射を受けたるに過ぎない、爾餘の大艦は何れも敵彈命中を免れ

たらしい、英死傷數は相應に之ありしも、其蒙りたる命中彈數は之を獨に與へたる命中彈數に比し僅少である、ルユツオーの如きは被害甚大で他の獨四巡洋戦艦も各二ダーズン内外の重彈を受けたるに對し、ライオンは十二回の重彈命中を蒙り其Q砲塔の破壊を見るに至り、プリンセス・ローヤルは九回の命中彈を蒙りX砲塔は其用を爲さざるに至りB砲塔は命中彈を受けしも内部の損害無く、タイガーは午後三時五十五分Q及X砲塔に夫々重彈の命中を蒙りしも何等の損害を受けなかつた、而してニュージブランドは一回インフレキシブル及インドミテープルは何等命中彈を蒙らない、されば英の受けたる命中彈は凡て二十四發を算する、而して英大艦隊中戦艦にして一大命中重彈

を蒙りしものは只コロサスのみ、パーラムは四發の猛烈なる命中彈を蒙りヴァリアントは全然無難、マレーヤは八發を受け其一はX砲塔に命中せしも甚だしき損傷を蒙らず、他の一發は六吋砲臺に大損傷を與へたウォースバイトよりは何等の報告に接しない、由是觀之英巡洋戰艦及戰艦の受けた被害大なる命中彈は凡て五十發を超へない(沈没三巡洋戰艦を含む)乃ち全命中彈の約一パーセント半に過ぎない、英艦隊側にありては多數の齊射を受けしも沈没せるは三巡洋戰艦のみだ、以上は概算でデフエンス、ウォリオー及ブラックプリンスの命中彈—三艦共沈没—を包含しない、然れ共其及ぼす範圍内に於て英艦隊側の射撃は優越で到底獨逸側の之に匹敵する所でない、蓋し獨逸側

の巡洋戰艦のみにては英の發したる全部の重彈の中少くも三パーセントの命中を蒙りしに相違ない、況んや—戰艦の蒙りたる損傷あるに於て—本論(一)を参照すべし。

若し讀者にして充分に本公文書より英砲力に關する情報を摘發するの勞を厭はずんば、幾多の問題に關する興味多き材料を發見することが出来る、然れ共惜哉本公文書の索引法其宜きを得ずと云ふよりも寧ろ内容文書目次の適切と認めらるゝものを外にして全然索引を有せざるを以て、本公文書の他日一般に普及し如此特有の公文書彙集を咀嚼吟味したるとき結局發せらる可き疑問に對する答案を本公文書より摘採するには相當耐忍を包含するものと認むる、本公文書を現在の形式に於て

研究すればする程益々公文戦記刊行の結局必要の明かなるものを見ずんば非ずである。

設計及材料

今ジュトランド海戦に参加せる英艦隊に就て一考せんに其一般装置圖は常に海軍省之を作成したるも其艦體艤裝兵裝及機械の細目計畫は全然英國の大請負造船會社之が作成の任に當つて居た、ボーツマス及デヴォンポート海軍工廠は約十二隻の主力艦艦體をベムブローク及チャタム海軍工廠は輕巡洋艦約八隻の艦體を供給しウーリツチ海軍工廠は輕砲及砲架の一小部分を供給した、此等を除き英大艦隊の全部は殆ど各地の私

立造船所の契約によりて建造せられたものである、凡ての裝甲、砲架及凡ての推進機關は悉く私立會社の設計及建造に依れるものである、艦砲其自體の大部分、就中重砲は、アイムストロング會社、サイカース會社の建造になれるものである、此等造船材料の全部は凡て嚴密にして微細に互れる海軍省製造方法書に基き製造供給せられ海軍省製造方法書は納品採否の規準を定むるが如き單純なるものでなく種々其他の重要點を規定して居る、乃ち私立造船所は皆海軍省製造方法書を標準にし使用材料及技術の點より考察して製品の素質を檢查してある、又海軍省の強要せる化學上又は物理學上の試験は其細目の範圍若は其程度に於て到底私立造船業者又は政府認可協會の

試験と雖も之に匹敵する能はざる程だ、尙又製品納付前に於ける成績検査に於ても私立會社は到底海軍省の自然的峻嚴なる要件の上に出づるものがない、海軍技術部より造船業者に對する不斷の進歩的要求、就中機關及兵器管掌部局の要求は材料技術の實質を改良し如何なる場合に於ても根本特徴として信頼性を有し且傳動の迅速、若くは經濟能率及操縦の妙を増進せしむることに集注せられて居た、ブラセー海軍年鑑の中に英海軍機關局長機關中將サー・デヨード・グッドウインは口を極めて私立造船會社が海軍技術上に有力なる裨益を及ぼせる實驗作業及種々なる改良事項に於て英海軍に致せる補佐の勞を稱揚する所があつた、然れども私立造船會社の補佐は少くとも互惠的

のもので世界中の船舶所有者は孰れも英海軍の實驗及改良事項により益する所が尠くない、一例を擧ぐればタービンと其減速裝置は外部より海軍に採用したるものなるも軌近長足の進歩を來せるは信頼す可き重油燃燒裝置と共に主として刻苦其勞に當れる海軍省内の實驗による結果である。
然れども材料及技術上の進歩は躊躇なく進行し得るも設計變更の施行は根本的に其性質を異にせる事項である、前者は既往の經驗に基きて誤り無きを得るも後者には然らず、其嶄新なる考案の屢々現はるゝは只意見の進化の結果として行はるゝに過ぎない、而も之れ多くの場合に於て例令確實なる根柢を有するものありとするも殆んど賛否兩論相半するを常とする、就

中如此困難は方位盤射撃器具の採擇の如き極めて重要な事項の決定に方りて其甚だしきを見た、該器具は大戦勃發の數年前に幾度か細心の注意を拂ひて試験を行ひたる後漸やく一九一四年に至りて初めて之が裝置實施を見るに至つて居る。

ジユトランド海戦に鑑みて結論に到達せんと企圖するに方り注意を要するは一方材料と他方設計で其有利なるは普く認めらるゝも費用、又は時日、承認期若しくは其他の理由に基き最近海軍造艦計畫中に出現するの不可能なりしものあれば其邊の區別を明にする事必要である。

戦役の教訓

却説英軍艦の設計に關しては、ジユトランドに於る十二時間に互る戦闘のみを以てしては假令之を重要なものとするも一部限局せられたる戦訓に止まるものである、蓋し吾人の學ぶ可き主要情報並資料は全戦役を通じて得たもので單にジユトランド海戦のみより獲たるものでは無いからである、一例を擧ぐれば軍艦驅逐艦乗組將校の皆均しく熟知する大戦の第一教訓は何ぞやと曰へば恐らくは艦内居住の價値と必要とであらう、此居住性は戦闘によりて之を認められたるものではなく天候の良否に關せず終始北海の哨戒に従事するに及んで忽ち根本的重要性として之を實際に顯したものである、論じて此點に來れば戦訓とは如何之を正解するは往々難しとする所多く場

合に於ては單に之れ既往の經驗を確證せるものに過ぎずとなすを得べし、一例を擧げんか此特別問題に就ては居住の價値は抑日本海軍の初めて得たる教訓の一であつた、日露戦争の初期に方り日本海軍は艦内士官寢室其他の室内可燃性用具を一切艦内より取除いたが其後漸次舊態に復せしむるの必要を感じた事恰かも一九一四年英國艦船が其艦内器具其他室内装置を除去したるも其後幾何も無く之が全部復舊の餘儀無きに至れると同一である、居室に於ける暖房増加施設も其後久しからずして喫緊の要を認められ殊に驅逐艦に於て痛切に感得した、尙又戦訓の一は往々にして艦の設計中に於て一方其プロバビリチー及ポシビリチーと他方正當なる重量と装置錯綜との重

大なる調和を行ふに方り故意に冒險的に決定したより偶然に起れるものかも測り難い、此例はマルボローが艦首に雷撃を受け戦闘後艦首より甚だしき傾斜を示したるに徴して之を知る事が出来る、同艦には全吃水を不當に増加する事無くして艦の左右又は前後の傾斜を正すに適切なる施設がないのである、之が適切なる施設は場合によりマルボローには有用であつたかも知れないが必須のものではない、此施設を装置せば凡て爾餘の主力艦は孰れも不必要の重量と錯綜を以て不利を蒙つたであらう、如此事項に對しては艦の小區劃を増加する事は勢ひ傾斜修正の施設を増加することになる、吾人の獲たる教訓は如此ものよりも寧ろ主として他の方面乃ち艦船の實力若くは其

耐抗性にある。

防禦装置

大戦中得たる艦船設計上の主要教訓は本論に於て既述した如く砲及魚雷に對抗する適切なる防禦の必要である、僅に二三分にして沈没せる二萬七千噸の輕装甲巡洋戦艦と多數の命中砲彈に堪へたる重装甲獨艦とを對照せば其差異頗る顯著なるものがある、ジェリコー元帥は英國製徹甲彈の素質を考察して曰へらく、概して英國製彈は獨艦装甲の外部に於て炸裂せるが如しと、海戦後英砲彈は構造、彈頭強度及信管の設計に關し著しき變更を來せるは事實だが一方に於てはジェリコー元帥の記

事は吾人の信ずる所で英艦船の敵彈より蒙りたる損傷の實狀撮影寫眞の多數を接受せる以前に成れるものであらう(一九二〇年二月二十日「ゼエンデニア」を參照すべし)、獨艦船に於ける砲塔と装甲帯の砲彈貫通状態を見るに當時存在せる彈丸を以て貫徹可能に關し一點の疑念を挟む餘地が無い、ドガー・バンク及ジユトランドの兩海戦に於て獨巡洋戦艦の砲塔焼失したるも英艦船に發生せる如き同程度の爆發は無かつた、此理由の一は恐らく獨艦砲の装薬は重き眞鍮の藥莢中に挿入せらるゝが故だ——之クルップ式尾栓の設計によりて課せられたる必要事件である——然れども他の理由は全く單なる僥倖に基くものであらう、海軍造船家にして未だ曾て集中齊射を防ぐに足る

艦船の考案を爲せるものはない、若夫れ單彈の防遏は夫れ或は之を爲し得可く否既に之を成し得た装甲の全目的は彈丸破壊力を減殺するにある——之によりて彈丸を防止し得ざるやも知る可からざれども砲彈設計者を強要して致命力のより少き彈丸を用ひしむるに至るであらう、乃ち普通彈の代りに僅少なる炸裂裝藥を有する徹甲彈を使用するように至るであらう、獨の十一吋彈一發はインヴェインシブルの七吋砲室を貫通して其破滅を來せるが如し、然るにクキン・メリー及インデフアチガールの場合に在りては二發若くは其以上の砲彈同時に命中した、蓋し之れ英艦設計の細目並原則の點に於て誤謬ありしによる事を認め、不適切なる防火陷裝置及火藥庫開閉裝置は砲架

の上部に於て砲焰を止むる能はざりしも要するに此等は巡洋戦艦の輕装甲に因由する些事である、若重装甲とせば前記の弱點は暴露する事なかつたであらう。

船渠と設計

英艦の輕装甲は幅濶き艦船を容るゝに足る船渠設備の缺如に基因する從て重量の關係上スタビリティの理由により重装甲を上部に及ぼすことが不可能であつたとはジェリコー元帥の斷言せる所である、然れども此説はクキン・メリーより狭き事十呎のインヴェインシブル及インデフアチガールに適用すること能はざるは勿論である、只此比較論は同時代の英艦船と米

日伊或は獨等の外國艦船に對照しての事である、過去四十年に互りて船渠の寸法決定者は其先見の明を缺きたる爲め斯の如き記念を遺さざるを得ざるに至つたけれども之に因りて如此長期に互りて英造艦計畫上の阻害を來さしめたりとせば之れ明に苦き事實と謂ふ可きである、艦幅の實際の差違は四呎乃至七呎で單にスタビリチーの點より觀れば從來よりも重裝甲部を引上げ、加之尙又水中に於て更に多くの對魚雷區劃を設置することが出来る、現在船渠入口の狭少なる爲或は盤木上水深の不足なる爲支障を感ずるもの尠からず——換言せばマーセイ河のバーケンヘッド側の船渠は恐らく最惡の例證であらう——然も追年海軍省に於て新設計案の審議に附せられ就中弩級

艦製造以來船渠の幅の擴張は早晚避く可からざるものがあつた時に方り何等一定の確乎たる措置を施さなかつたのは甚だ驚く可き事である、況んやジェリコー卿の曰へる如く本事項の絶へず海軍省に於て論議せられつゝあつたと云ふに於ておや。大艦は雷撃に對し特に鋭敏なりとは大戰前既に世人周知の事にして其水中防護法は一九一四年海軍造船協會の席上討議せられたが何等特別の解決を見なかつた、艦幅にして一度擴張せられんか、其後製造にかゝる最近戦艦の入渠は或一定の地に限局せらるゝとするも、水中防護は比較的解決容易なるものがあつたであらう、勿論水中防禦法の解決を見ればとて直ちに機雷の防止に何等影響する所無きも、之を既往蒙りたる著き立

遅れに比すれば儘に魚雷の被害を割引することが出来た、近來大艦問題に關し荒唐無稽の説が英國第一流の新聞紙上に頻々として現はるゝものあるは笑止千萬であるが、其新聞紙上の大艦論に對する障害の一は將來魚雷の容積擴大を見るに至るものある可しと云ふにある、彼等は魚雷の頭部に一噸 T、N、T の炸薬を填充す可しと迫るは事理を辨ぜざる甚だしきものではないか、現在の二十一吋魚雷は T、N、T の約十分の一噸を有し其重量一噸に達して居り其發射管と裝架は更に一噸半の重量を加ふ、此外魚雷發射裝置の完成には魚雷搭載起重機、空氣壓搾機を初とし數種の器具を要するから、今裝薬の重量を二倍となし速度は依然として舊の如くするも魚雷と其附屬器具の重量は二

倍以上に達するであらう、—故に魚雷搭載は小艦船に取りては可なりの重量増加を來すであらう、十五吋普通榴彈の炸裂薬は二十一吋魚雷の其と其重量は殆ど均等である、今之を倍加せば現存の十八吋砲の炸薬と同量のものになる、假令如何に裝薬の量を増加しても尙一の解決を要する難問題は魚雷を如何に利用するかと云ふ事である——乃ち敵の針路、速度を精査して雷撃の奏效を期する問題は依然として殘存するのである、艦幅は魚雷に對抗する適切なる防護の施設に要する一重大要素たらんも魚雷搭載航空機が既往の水上艦に優りて主力艦要撃に奏效するものあらんとの説は種々なる實際方面を無視するもので此實際方面中最重要視す可きものは航空機の目星を附く

る犠牲艦の復讐である、航空機の攻撃は如何に考ふるも其支障大なるものがある、水上艦に對して航空機の飛翔は軍艦に標的を供する事恰も進行を示す汽車の攻撃標的を供するに彷彿たるものがある、魚雷の容積増大は必ず飛行機の容積を不釣合に増大するの已む可からざるものあるに至るであらう。

艦型

大艦問題の是非論は最近外國新聞紙上を賑はし之に伴ひて潜水艦航空機魚雷等の怪物は凡ゆる論衣を被りて現はると雖も一として吾人を信服せしむるに足るものがない、從てジエトランド海戦公文書の引照に何等の影響を及ぼすものがない、唯

之あるはフォン・シエーア大將が其海戦報告書中に於て艦型の比較的價値に關する其意見を陳述し居れる事である、フォン・シエーアの陳述は彼の全然判断を通り抜け或場合には禮節を破りてジエリコー郷を貶さんと欲する批難者流を狼狽せしむるものがあらう、シエーア大將曰く

海戦は實證するに獨艦隊編成に於て且獨逸各種艦型の改良に於ても吾人は正確なる戰略並戰術上の意見によりて指導せられ且又是を以て吾人は今後益々同一の經路を繼續せなければならぬと、

凡ゆる武器は悉く其分を盡して此結果を齎せりと雖も其決定的分子は直接間接共に大艦の長射程重砲にある、敵の蒙りた

る既知損傷の大部分を該重砲の結果で驅逐隊が敵主戦艦隊に對抗し有效なる攻撃遂行の可能なるものありしも亦實に之に因る、如此觀察を爲したればとて強ち彼の敵戦艦隊に攻撃を加へ遂に獨をして全然英軍より回避を可能ならしめたる獨驅逐隊の殊勳を滅却するものではない。

是を以て戦艦及巡洋戦艦等の大軍艦は依然として今尙制海權の基礎である、恐らく今後も亦然りであらう、吾人は砲の口徑を擴大し速力を増進し吃水線の上下に於ける装甲防禦を充分にし益々大艦の改良を行はなければならぬ。

叙述の意見に於てシエーア大將は一九二〇年三月十九日附を以て發表せられたる英國海軍政策中に明示せられたる如き

英國海軍省の意嚮を極力應援せるものと謂ふ可し、ジユトランド海戦に於て最醜劣を極めたるものはデフエンス及ウアリオリ型によりて代表せられたる中巡洋艦型である、此等の艦が如何にして如斯醜態を呈し敵砲火に自らを暴露するに至れるや其明細なる理由の公表を見ない、只視界朦朧の故なりと記されたる而已である、晝夜兼行の大攻撃を行ひし割合に我(英國)驅逐隊は期待せられたるよりも比較的小被害にて退却し輕巡洋艦級は拔群の功を顯はした、嚮導驅逐艦と小輕巡洋艦に就ては兩型の合併に向ふ傾向あるようだ、直衛用としての驅逐艦は巡洋戦艦を凌駕するに足る適切速力の餘裕を有たなければならぬ、此速力はジユトランドに於て充分なりしとは認め難いライオ

二六四

ン及其他の巡洋戦艦は其直衛驅逐艦の煤煙によりて屢々障碍を蒙つた、蓋し驅逐艦は其位置を支持する爲極度に其罐を強用せなければならなかつた。若し戦闘にして引續翌晝間に及びたとせば恐らく驅逐隊は魚雷の缺乏を告げ遂に小型高速輕巡洋艦をして魚雷發射艦の職分を遂行せしむるの結果を生じたかも知れぬ、然れともジユトランド海戦は魚雷發射艦による夜襲の全問題に關しては午後九時過彼我兩艦隊の事實上の離散によりて之が教訓は豫期せられたるよりも多くはない。

兵資

英國海軍省の要求せる兵資素質の高標準は海戦の全局を通

じて雷に正當と認められたる而已ならず尙又兵資其自體も受く可き報償を得たりと云ふを得るが、推進機械の動作は凡て豫期以上の好成績を示し哨戒中の驅逐艦及輕巡洋艦は軸管又は張出承に考慮を拂ふ事無くして長距離進航の記録を作つたのは關係當事者の孰も歎賞せる所である、只二個の弱點とせるは大戦の初期中に於ける(イ)復水器と(ハ)輕巡洋艦及驅逐艦罐である、前者の支障は其及ぼす影響重大で大艦は踵を接して之が餘波を蒙り必要なる修理中勢力の餘裕を減縮した、後者にありては一方罐管の腐蝕と一方ヤーロー式罐の下部水室の底飯の機械的衰退に在る、戦時中の艦舶は平時に於けると全然其趣を異にし僅少の碇泊期間にて引續き長期に亘る強航は自ら之に伴

ふ支持處理法の考案を要するに至れるものがある、而して之が決定を見るに至れる迄は必要なる時に方り艦船の服務を一時の停止せるの例頗る多かつた。

近來は餘り多く聞かないが近年に於て屢々論議せらる所によれば外國の艦船で英國で建造せられたものは英國艦船に比して著く優れる點がある、是れ或程度迄主としてアームストロング會社に對し餘りに干涉しなかつたのに由るものであらう然れとも往時建造に係れるエルスウイク巡洋艦は決して現時の海軍省設計に劣つては居らぬ、然れども三隻の外國戰艦で大戦勃發早々土國より購入せるエチンコート、エリン及智利より買收せるカナダは孰れも相當の變更を加へなければ英國海軍

省の要件を充すに足らなかつた、此等の艦は前希臘國巡洋艦チエスタパーケンヘッド前希臘及土國驅逐艦及四隻の智利嚮導驅逐艦等戦争の初期に方り英國に購入せられたるものと共に孰れも英國海軍の精銳に一段の有用なる力を添へた。

銅線砲對無線砲の不斷的問題に關してはジユトランドに於る經驗は英國製設計の優越を確證する只一失敗の例はマールポロに在る、同艦に於ては多分砲身内に於て猛性爆發的徹甲彈の早發に基くものと見へ内部A筒は龜裂を生じ外套の分裂を來した、造砲上の報告は何等本公文書中に包含せられないから造砲上の情報を得る事僅少である、火管の缺陷に基く不發は屢々之を見たが何等の支障を來さなかつたようだ、各艦は孰れ

も口を極めて方位盤射撃装置の価値を賞揚して居る此装置は僅に主砲に應用せられたるに過ぎずして多くの場合之が装置を見るに至れるは僅に最近の事である未だ曾て副砲に之が應用を見ない然るに獨弩級艦の最初のもは既に之が應用を爲せる事は明である。

海戦の示せる各種の小細目中には新式の器械採用よりも寧ろ使用の結果現存兵器の改良の可能なるものある事尠からざるを示して居る、即ちより早期に命中を加ふる爲現在測距機の改良の如き其一例である、此外の例は左の如くだ。

(イ) 夜間視認法 夜間視認は明視の可能あるに非ざれば難事だ、蓋し誰何艦は若し對手艦にして敵艦なりとせば回答に

代ふるに齊發を受くるに相違ないからである。

(ロ) 探照燈に關しては英の探照燈は獨のものに比して其力劣れるは承認せられたが、後者の燈は注意を加へて使用せなければ重大危険の原因となる虞がある、獨逸側は探照燈の補助として照明彈を使用した獨逸側探照燈は點火以前に操縦せられ目標探索に寸時も浪費する所無かつた、此等の探照燈は兩双の武器にして往々之が使用を裏切り易い其一例は第三輕巡洋艦隊の夜戦に於て之を見た、サウザムブトン及ダブリンの兩艦は攻撃を行はんとて其探照燈を點火し却つて敵の猛撃を蒙つた兩艦の直後なるノッテンガム及バーミンガムは點火せざりしが故に敵彈を免れた。

(ハ) 大艦の副砲弾薬の置場及燃焼防止並小艦の主砲装薬燃焼防止の進歩せる方法の必要を感じ且小火災に處する爲漲水及排水施設の要ある事を見た。(終)

此處に左の如き挿話がある

回顧すれば大正七年頃で余が軍令部參謀時代の事である。或る日の午後三時頃、給仕が余の執務して居る室に来て、「日高參謀！軍令部長(島村大將)がお呼びです、若し今急な用がなければ先般のジュトランド海戦のことを聞き度いから海圖を持って部長室まで来て呉れる様にとの事です」今手放せない要務があります、が十五分位過ぎれば片着きますからそうしたらすぐ伺ひますと御返事をして置け」と給仕に申付け十分ばかりでも用も片着いたので早速部長室に行くと、「ソナに急がないでも宜しかつたに、急な用と云ふのは片着いたか」、「片着きました」との

余の言を聞かれるや手づから椅子を進められて、其に掛けて君の好物の葉巻も有るから其れを喫ひながら、緩々話せ、聞かうと云ふ事だ。

ソコデ余はテーブル上に海圖を擴げ艦型を配置し、今日までの諸情報を綜合すれば海戦は此の如くでありました、然るに英國ではジェリコー大將(大艦隊司令長官)の行動に非常な非難があり大將の辯明もあります、非難は云々大將の辯明は云々です、此時まで軍令部長島村將軍は黙然として熱心に聞いて居られたが突然口を開いて、其れに就て君はどう思ふかと質問せられた、余は之に答へて、今日では諸種の事情が分明し居る爲め、そうした非難も出るが其當時ジェリコーが大艦隊を率ゐて戦場に

到達した午後六時頃には濛氣四塞、敵味方の位置すら分らなかつたから右翼列に戦闘展開しても相當理窟が立つし又ジェリコーの實際行つた如く左翼列の方に展開しても理窟がつかま「す」ソコデ余は茶目氣分を發揮し、部長！アナタが假りに位置を換へ英國大艦隊司令長官であつたとしたならば此場合如何されま「すか」と逆襲してみた、島村大將は莞爾として微笑を湛へ、今夜一晩考へてみて明日返事しよう」と逃げらるゝので余はスカさ「ず」今は一時一刻を争ふ時です、トテモ、ソナに待てま「せん」部長「困つたナ……其れでは君を參謀長にしよう、ド「」ダ參謀長！」余「困りました、部長、ソナに嘆息することは無い斯うすれば宜しいではないか」と一本の鉛筆を卓上に立て、倒れた方に行き其

れから後は天祐に待つばかりだ」余、日本海軍の名將軍と言はれ
 青年將校渴仰の中心たるアナタまでが何の人事を盡す所なく
 唯天祐を待つと言はれたには少からず我々を落膽失望させま
 した」と臆面もなく申したら將軍は「人事を盡して天祐を待つと
 云ふことはある、併し君は乃公が何にも爲さず唯天祐に期待し
 て居る様に言ふたが、顔面に微に微笑を帯びながら、乃公の參
 謀長には我海軍で名參謀と言はれて居る君が研究を盡し考に
 考を重ねて居るから充分人事を盡して居るではないか、其れは
 兎に角矢張りジュエリコーの行ふた方が良い様だ、今まで誰にも
 話をしたことが無く君に話すのが初めだが一體海上の戦闘に
 は敵を右舷に見て闘はねばウツだ右舷戦闘なら均勢ならば必

ず勝つし多少の劣勢でも戦利が得られる、乃公は中佐時代大學
 校の兵學教官で古來幾多の戦例に就て研究を試みたが皆然り
 だ、君に聞くが某の海戦は如何か、某の海戦は如何か」と矢繼早や
 の質問で恰も海戦史の試験が始まつたようであつた。其れに
 一々答へて居る内に成程妙だナと考へる様になつた、一體之は
 如何いふ理由ですか」と部長に反問すると、部長は「理由は不明だ
 が古來幾多の戦例は雄辯に之を證明して居るのは今君が一々
 答へた通りだ之は海戦ばかりではない、試に銀座通りを散歩し
 ても同一だ自分の右側にある店は早く目につくが左側のもの
 は特異の照明具でもないと思落すことがある」余、部長！眼の爲
 めではありませんか、失禮の様だが簾睨みではありませんか」

部長ナリニ其んなことはない先日不思議に思ふたから眼科の
 醫者に聞いてみたら其れは眼の爲めでは無く精神作用であら
 うとのことであつた。余日本海々戦の事は日露戦史に書いてあ
 りますが同航戦にした理由や其他伺ひ度いものですな。時に午
 後四時近く日光はカーテンの隙間から斜に室内に射し込み、紫
 烟緩かに棚引く中に見れば百戦功成りし老將軍が沈黙考過
 去の追想に耽り、其前には年齒未だ熟さざる青年將校が將軍の
 口より洩れる一言一句も聽き洩らさじと耳をすまして傾聽し
 て居る様は眞に一場の劇的シーンであつた。將軍はやがて口
 を開いて、モ一十六七年になるから記憶をして居らぬが、バルチ
 ック艦隊には第三戦隊が觸接して時々刻々敵の位置、針路、速力

等を無線で報じてよこした、其度毎に之を海圖上にトレースさ
 して見ると結局我艦隊は北に位置し南西に向ひ、敵は南に占位
 し北東方に向つて居たので此儘で進めばお互に左舷を見せて
 航過することになるから、今日の勝利は偕てよなと考へた、併し
 君も知つての如く殿艦に居て氣はアセルが旗艦には加藤も居
 るし秋山も居るから拙いことを司令長官に進言もすまいし事
 が事だから幕僚にも話す譯に行かず獨り焦ら立つ胸を押へつ
 つ居つた、心なき時計は兩國の運命を刻一刻と刻みつゝ午後一
 時五十五分になるや三笠は俄に左舷回頭で十六點の正面變換
 を爲し我艦隊は右舷戦闘の對勢となつた、間もなく發砲を開始
 せよの信號が揚げられた、之れでこそ今日は素晴らしい勝利が得

られると思つたから、傍の參謀を顧みて其れを言ふたが參謀は三笠の方を指して三笠はドーしたのか少しも發砲が出来ません、多分砲の故障かも知れませんが、言ふて頗る心配さうであつたが、三笠が單獨で闘ふのではないから三笠が發砲不可能でも心配は要らぬと頻りに敵の行動を注視して居る内遂に斯の如き奇勝を博すことが出来たのだ。


「だから海上の戦闘は右舷戦闘に限る様だ。」

「其れはソ一でしょうがジエトランド海戦には英軍は優勢でありながら而も今お話の右舷戦闘でも劣勢な獨軍に對しタイした勝利も得られませんが、五分五分位な戦果を得たに過ぎませんでした、之は如何なものでしょうか、」君は先刻以來英軍の攻

撃精神を疑ふ様な口振りであつたが、若し英軍に攻撃精神が旺盛でなかつたならばいくら右舷戦闘でも勝利は得られるものぢやないぞ、攻撃精神が旺盛であるならば劣勢でも勝利を得る例は幾等もある、然し物質と精神とは兩立しない否併行しないことが可なり多い物質が充實すると却て精神が衰頹することがある、我海軍では近い内に八四艦隊が充實する筈だが攻撃精神が之に伴はず却て衰頹する様なことが若しあつたら一大事だ、近頃世間の思潮を考へるとドーモ悲觀材料が多いのは遺憾だ、コンナ問題は佐藤中將や君などの方がお得意だから、講演などに出たらよく世人を警めて置くが宜い、お退廳の鐘が鳴つたから、續きがあつたら又此次にしよう。」余は一禮して室を出

るとき島村將軍は聲をかけて「ジユトランド海戦の研究は尙續けて充分にやれ、面白い教訓があらうぞ、予は軍令部參謀の職を奉ずること十有餘年であつたがコンナに愉快な日は無かつた、心の中にはジユトランド海戦の研究は是非繼續しようと思つた。」

淺學無識で事志と違ひ思ふ様に研究が進まない内大正十一年病氣に犯され中途にして軍職を退かざるを得ざる様になつた次第である。

發行所 帝國海軍社 東京市麴町區内幸町一丁目六番地 電話銀座(57)三一九二番 東京五二三九五番	究研戦海ドンラトユジ		著作所有
	著者	日高 謹爾	東京市麴町區内幸町一丁目六番地
	發行者	橋本 正雄	東京市神田區表神保町十番地
	印刷者	前田 宗松	東京市神田區表神保町十番地
昭和二年五月十五日 印刷 昭和二年五月廿三日 發行 定價 金四圓八拾錢 所 刷 印 社 成 文			

2A60

